

東京神田裏神保町一番地

法學協會雜誌社

第九拾第

英米語學の心得と詳よ説明したる事
習字臨本たる草書文字の美麗なる事

驛遞局認可

明治十九年六月廿五日發兌

東洋學藝雜誌



第五拾七號

東洋學藝社



目録

○女子の教育を論し併て耶蘇教擴張の法を説く

文科大學教授 外山 正一

○物理學用普通臺 第一高等中學校教諭

村岡 範為 馳

○周易起源

末松 謙澄

○微粒子病之説

駒場農學校助教理學士 佐々木忠次郎

○支那戰國人民の氣質と論す

文科大學赤座 好義

○雜報

○スウェーデン皇帝の懸賞問題 ○ベルジウム皇帝の懸賞問題 ○帝國大學記要 ○小遊星 ○日蝕皆既 ○アル

ハン、シラীগ ○第五十九回理醫學士會 ○磁氣を執

らさる鋼鐵 ○鐵の子デ 鑄付かざる法 ○葡萄の蠹と防

く法 ○地學會誌 ○堤防の土止 ○暴風の長旅 ○動植物

寒冷に耐ゆると ○日本地震學會報告第三冊 ○英語會

○批評

○グレイズブルック、シヤウニ氏の物理實驗法

理科大學教師 ノット 氏

○マカリステル氏有脊及無脊動物書

理科大學教授 箕作 佳吉

○地震報告

○雜錄

○補文館記

文科大學 内田 周平

TŌYŌ GAKUGEI ZASSHI.—Vol. III, NO. 57.

(JUNE 25, 1886.)

CONTENTS.

ON EDUCATION OF WOMEN AND METHODS OF SPREADING CHRISTIANITY.

by Prof. M. TOYAMA, Imperial University.

ON A CONVENIENT STAND FOR USE IN PHYSICAL LABORATORY.

Communicated by Prof. H. MURAOKA, Imperial University.

ON ORIGIN OF EKI.

by K. SUYEMATSU.

ON METHODS OF TREATING PEBRINE.

by C. SASAKI, Komaba Agricultural College.

ON SPIRIT OF PEOPLE DURING THE SENGOKU PERIOD OF CHINESE HISTORY.

by Y. AKAZA, Imperial University.

REVIEWS :— Publications of Messrs. Longmans, Green & Co :— Glazebrook & Shaw's Practical Physics ; Macalister's Vertebrate and Invertebrate. Report of Earth-quakes during 1885.

MISCELLANIES :

On *Hobunkwan*, by S. UCHIDA, Imperial University.

PUBLISHED by TŌYŌ GAKUGEISHA.

No. 1. Urajimbōchō, Kanda.

TŌKYŌ, JAPAN.

東洋學藝雜誌第二卷第五十七號

明治十九年六月廿五日發兌

○
女子の教育と論じ併せて耶蘇教擴張の法を説く

外山 正一

人の賢愚を知らむと欲する者は何よりも先づ其の母の賢愚と問ふべし。國の開化を進めむと圖る者は宜しく先づ其の國の婦人を改良することと務めざるべからず。今日我が邦に於て人の注意を要することの擧げて數ふべからずと雖も蓋し婦人の教育は之と要する者の他に有らざるならむ。我が邦將來の命脈は我が邦將來の婦人の強弱賢愚に繫るものと言はざるを得ず。強健にして英敏なる母の胎内よりやどり強健にして英敏なる母の手より育ちたる者よあらずむば稍々成長したる後よ如何ほど善良なる教育と授くればとて決して善き人物よはなり能ざるならむ。我が邦にても追々教育の大切なるを曉り。政府にて大學中學等を立てらるれば民間に於ても何協會何専門學校と唱へて種々の高等學校を立つる様よ成りたるは喜む

しきよとの限りながら。其の中に憂ふべきは此等高等學校は概ね皆な男子の爲めに立てられたるものにして。女子の爲めよ立てられたるもの僅に一二の微々たるもの有るのみに止ること是れなり。男子の高等教育が必要ならば女子も高等教育の必要なり。今日は斯の如く女子の教育と投げ遣りにおし置く時勢なるが故よ。女子の高等教育は如何なるものたるべきかと云ふ問題に關して世人の懐ける考への如きも至つて漠然極まるものなり。然れども女子の高等教育の必要あることと説くものは其の何様のものたるべきか豫じめ定まりたる考へと懐かざるべからず。余輩不肖なれども聊か其の考なきにあらず。特り其の考へ有るのみならず其の教育を我が邦の女子よ授くるの方法に關しても亦其の説なきにあらず。讀者諸君靜かに余輩の説く所を聽かれよ。教育は素より當時の時勢よ適したるものたらざるべからず。武家の世の教育は武家の世に相應し文明の世の教育は文明の世よ相應したるものたらざるべからず。女子に薙刀の使ひ様を習はしたり自害の仕様と教へたり。家に

在りての親に従ひ嫁しては夫に従ひ老ては子に従ふべきものなりとぞ。氣の毒千萬なる覺悟を爲さしむる教育の如きも封建時代の婦人への素より適當したる教育にてありしならむ。いつ敵ら攻めらるゝかも知れず。何時君辱められて臣死さねばならぬかも知れぬ如き時代は在りては女子と雖も薙刀の使ひ様位は之と知らねばならず。潔く最愛の子の喉元と懐劍よてつらぬき其の身も共に刃又伏すなど云ふ覺悟を常々爲さしめ置くも素より必要なることとあらむ。さりながら文明の世は薙刀三昧や懐劍騒ぎの教育は毛頭入らざることなれば。かゝるまじとば文明の御代の女子を教ゆるの素より無用のことにと有る。されば日本帝國も封建制度が廢せられ目出たく海内一統して天下泰平の御代となり。文明かせよ化せられて一から十まで舊來の野蠻の風を脱却し開化の風に改まる勢ひなれば。教育の如きも二十年以來其の面目と更ためたること實に著しきことにて。女子の教育の如きも亦大いに改良せたりと言はざるべからず。さりながら他の事物と共に女子の教育は改良するよはしたれども其

の改良の度は余輩に決して満足を與ふる能はざるなり。讀み書きを習はしたり理化學と學ぶることのみと以て教育なりと思ふは大いなる誤りなり。蓋し人の教育の多分に於て且最も大切なるものは教場にて授業時間中を得るものよりの却つて其の授業外に得るものならむ。教授の授業外の教育とは如何なるものか。生るゝと直ぐ父母或は乳母より受くる教育。稍成長しては子供仲間より得る教育。學校に往ては學友より得るの教育。教師の品行動作と見て得る所の教育。社會に出でて事を執るに當つては種々の人物に接し種々の事物に觸れ種々を経験によつて得る教育等則ち是れなり。此の類の教育は學校教育を受くる者も之と受けざる者も共に受けざるべからざるものなり。如何はと善良ある學校教育を受くるも此等の教育が善からぬものならむは折角受けたる學校教育も水の泡に属すること尠しとせず。何人を論せず某社會に生れ其の社會中に成長したる者は。よしや學校教育としては左のみ受けざる者も無き者と雖もよく其の社會上の地位と保ち居ることと得るは何によ

る。全く學校外に受けたる教育の徳によるなり。開化國

も學得たる者と雖も開化國に留まりしこと僅に二三年に

る。全く學校外に受けたる教育の徳によるなり。開化國の人は學校教育として左のみ受けしこと無き者と雖も開化人の資格を存し。亞米利加インヂアンの如きは之を開化國の大學校に入れて高等教育を授くるも到底野蠻人の資格を脱する能とざるものは。蓋し遺傳の性質の爲めによること少なからざるに違ひなしと雖も。學校教育の影響僅かして幼年の時よりインヂアン社會中に於て自然に受け得たる教育の勢力の強きによることも亦少なからざるならむ。インヂアンは到底インヂアンのこと免かれ難きことながら。之として最も多く他のインヂアンと違はしめ開化人か最も近からしめむと欲せば。幼少の中より之を開化人中に生ひ立たしめ常に開化人の人情風俗に染まらしむるより外に手段はあらざるならむ。今の日本人の中に最も西洋風に化し最も開化人の資格を具へたる者は。必しも専門學科に熟達したる者にはあらず。専門學科は何も學び得たるもの無きも幼年の時より開化國に渡り始終開明の空氣を吸ひ開化人の人情風俗に化せられながら成人したるものにぞある。専門學科は誰より

も學得たる者と雖も開化國に留まりしこと僅に二三年に過ぎざりしのみならず。其の二三年の間も開化人との交際などに少しも意を用ひしこと無く只々一心に専門學科に従事せし者の如きは其の専門學科の萬々結構なるも其の人柄たり思想たり多くは純然たる日本人に過ぎざるならむ。然れども海外に留學する者之イヤでもオウでも多少開化人と交際をせねばならざるが故に如何なる頑固物と雖も幾分か開化人かなりて歸り來らざるは稀なり。假令僅の間と雖も開明國に留學し開明人と交はりたる者は開化人の資格と具ふること曾て開化人と接せたる者か者に比ぶれば幾分の優らざるものは稀ならむ。然り而して國として眞に開明の地位と得せしめむ爲めには各種の専門學に長じたる者の國も多く出來むとは素より缺くべからざることなれどもまた同様缺くべからざるは開化人と情と同らし開化人と思想を同らす如き者の多く國に出來むこと是れあり。學校教育が盛なりたればとて専門家が多くなりたればとて其れあて一概に國が開けた文明にあつたなどと誇る譯は決してあかざるなり。

不充分ながらも我が邦が今日の如く開化諸國と人交はりの眞似までも出來る様になりたるは全く幾分か西洋の事情に通し西洋人の思想を以て物事を考へ得ることの出來る如きものが政府にも民間にも追々多くなりたるが爲めなり。即ち西洋人の喜ぶ所を喜び西洋人の哀む所を哀み西洋人の怒る所を怒り西洋人の耻る所と耻る如きものの幾分か我が邦も出來たるが爲めあり。而してか、るヤカラが政府も民間も幾分か出來たるは維新以來年々歳々數多の日本人が或は留學と號し或は視察と唱へ或は大使のお供と出かけ或は公使館の書記生とあり或は博覽會の出張員となり或は取調べ或は研究と種々雑多な名と付けて開化國と渡り開化人と交り開化の空氣と吸ひ開化の人情に化せられて歸り來れる者の日よ月に絶間なきが爲めなり。國の進歩の爲めに上等社會の者の洋行は實に必要のことなり。洋行するにあらずむば眞に西洋風儀と化せられむことは甚だ難し。然れども洋行の必要なは特り男子のみに限らず女子も亦同し。特り男子が開明の風儀に化するのみならず女子も亦之と同様に開明の

風儀に化するにあらずむを其の邦に決して開明の域に達すること能はざるなり。然るに今の有様にては男子は開化人の風化せらるゝ者日よ多きと加ふれども女子に至りては西洋風儀に化せらるゝ者實に僅々にすぎず。これ一は男子の學校教育に比ぶれば女子の學校教育のみに忽かせにせられたると又一は女子に開化國へ渡り久しく開化人と接して開化風と染る如き者至つて少なきが故なり。然るに學校教育と改良するは易きことなれども婦人をして男子の如く多く洋行せしめむことは到底出來かたきことなるべし。さりながら我が邦の婦人として親しく開化人と接せしむるにあらずむば到底我が邦の進歩は充分なること能はざるならむ。されば婦人と少なくとも男子と負けざる開化人と爲さむと欲せば一方に於ては女子の高等教育を改良し且盛んよなすことと務め。又一方に於ては我が邦の婦人として親しく開化人に接すると得せしむるの方法と考へざるべからざるあり。世間には女子の教育と云へば讀み書き算術、理化、博物、唱歌、踏舞、裁縫、圖書等の學科と授くるる止まる如く思

ふ者往々有りと雖も斯の如き學科のみよては女子の教育

廣く行はしめむ爲めには牛肉を買つても骨は何の役も立

明の風儀に化するのみならず女子も亦之と同様に開明の

唱歌、踏舞、裁縫、圖書等の學科を授くるに止まる如く思

ふ者往々有りど雖も斯の如き學科のみよては女子の教育は極めて不完全ならむ。女子の教育よして家事經濟と家内衛生の二科を缺きたるものは決して完全なる教育とは言ふべからざるあり。この二科は何れの國の婦人にも缺くべからざるものなれども殊に我が邦今日の婦人に於て然りとす。而して余の所謂る家事經濟たり家内衛生たり西洋主義の家事經濟、家内衛生の事にして日本主義の家事經濟家内衛生の謂にはあらざるなり。我が邦の婦人が西洋流の家事經濟と家内衛生とよ通せむとい今日よ於て最も必要なり。今日我が邦の男子には西洋風のくらし方と慕ひ居る者漸く多しと雖も斷然之に變へる者の少なきは多くは婦人が西洋風のくらし方を知らざるによる。例へば日本流の食事と廢して西洋風の食事と改めむには高き給料の料理人と雇ひ何もかも之に任せ置かねむならず。又子供に洋服と着せむと欲せむかぶり物のら足袋と至るまで之と總て商賣人の手に任せ置かねばならぬと言ふ如き事情では我が邦の如き貧乏國に西洋流の衣食住の廣く行はれむよとは到底出來ざるならむ。西洋風の衣食と

廣く行はしめむ爲めには牛肉を買つても骨は何の役も立ち。アブラは何の用もあると少しもムダの無き様よ爲すことと知り。親父の古洋服とさりつめて子供の股引とヤケットと拵へること杯と心得居る婦人が多くならねばならぬなり。又家内衛生の如きよ至ては婦人がよく之と心得居るよあらずむバイクラ男が衛生學よ明るきも到底コレラの豫防も熱病の防ぎも充分に出來ず。何程男が西洋風の子供の仕立方に感服しても女子が其の道に暗くしては決して西洋風に子を育てることには出來ざるならむ。將來我が邦の男子は婦人に此の二科の必要なると感ずること愈々多くなるならむ。婦人が此の二科と心得居るよあらずむば西洋風のくらし方を爲さむこと到底出來がたきことならむ。さりながら家事經濟の如き家内衛生の如きは親しく西洋の婦人に就きて之を學ぶにあらずむは決して學び得らるべき事柄にあらず。されむ此の事に關しても我が邦の婦人が西洋の婦人に親しく接するの必要なるは明かなり。さりながら將來我が邦の婦人の殊に必要なる資格と尙ほ

よの外あり。之と擧れば即ち將來の婦人は成るだけ男
と同感の出来る如きものたらざるべからず。婦人と雖も
人には人たる者の義務あることを知る如き者たらざるべ
からず。「セルフレスペクト」の心を存し徒らに人前の
みと飾るが如きものたらざるべからず。男子と同等のツ
キアヒが出来、社會に出て、よく交際を爲しよく事と爲
す如きものたらざるべからず。久しく西洋に留學して西
洋の風俗に化し西洋人の感ずる如く感じ西洋風の考へを
持つたる男子の妻たらむものと等しく西洋人の感ずる如
く感じ西洋風の考へを持つものたらざるべからず。男同
士でも久しく西洋人と交りてよく西洋風も化したる者と
全たく日本風に育ちたる者とは學問に於ては優劣少しも
無きも兎角何かよつけ口の合はざるよとは皆人のよく
知る所なり。女子でも其の通り學校教育のヨシアシと兎
もあれ西洋人と親しくつきあひて西洋風の心になりたる
女子にあらずむば將來の高等男子とい到底口之合はざる
ならむ。而して封建時代の如くに夫婦の關係は奴隸と主
人との如きものなりと思ふこと無く夫婦と全く同等一體

のものなりとか最も親しき相談相手たるべしとか思ふ如
き者を取りては口の合はざる者を妻とし娶らむことは素
より好まざる所ならむ。將來我が邦の婦人は交際家の妻
となつては夫を助けて共に交際に従事することも出來學
者の妻となつては夫の仕事とよく理解しよく感賞するこ
とが出来。慈善家の妻となつては共々慈善の事に與かり。
男子が某々の會と設ければ女子も亦某々の會と設け男の
手を假らずして慈善の事と爲し救助の事に従事する如き
ものたらざるべからず。

然れども殊々將來の婦人は必要なる改良の少しく「ヴァニ
チー」の心と減じて之より代るに「セルフレスペクト」の心を
以てせむこと是れあり。何れの邦と論せず女子と云ふも
のは兎角「ヴァニチー」の多き者なるが我が邦の女子は子
と愛する心の外と「ヴァニチー」心の爲めに最も多く支配
さるゝものなり。而して其の「ヴァニチー」たる實に下等な
る性質のものにして上等なるものは甚だ少なし。我が邦
に於ては女子のみならず男子にも「ヴァニチー」が多けれ
ども男子の「ヴァニチー」は功名手柄となして人のら賞め

人との如きものなりと思ふこと無く夫婦と全く同等一體

とも男子の「ヴァニチー」は功名手柄となして人のら賞め

られむとせる如き稍高等あるものもあり。然るも女子に至りては其の働きの範圍極めて狭く。廣く社會に對しては少しも關係なきもの、如くなるが故に其の「ヴァニチー」は僅に髮飾りのことや衣服のことに關するもの若しくは容色自慢等の如き極めて淺劣なるもの多し。素より女子には廣く人を愛するの心だの。社會に對しての義務だの。人たる者の道だのと云ふ考は藥にまたくも無さが常なり。道とか義務とか云ふ考へは少しは有るには有りても貞女兩夫に見ゆずとか浮世の義理とか云ふ位のおとにしてこれ等の道と履む者は自みから好んで之と爲すも非ず。いや／＼ながら詮方をしに無理往生の心中と同様に泣く／＼従ふ道にぞ有る。佛法の徳薄くして慈悲の心は我が邦の人には至つて少なき故善事を爲して樂みと爲さむと思ふ如きものは後生と願ふ婆々の外は稀に一人ひとりも有るか無し。概して言へば今日まで我が邦婦女子の生活は蛆虫同様の生活に少し毛はの生はるものに過ぎざるなり。かく淺ましき風俗を一洗なして幾分か開化國の婦人の資格と得せしめむことは今日極めて肝要のことなるが又極めて

むづのしきことなり。前も言へる如くこの改良を遂げむ爲めには特り學校教育と頼むべからず我が邦の婦人として親しく西洋の婦人に接せしめて其の風習に染まらしめむこと最も必要なり。さりとして前も言へる如く婦人多く洋行させむことは到底出來ざるおとなるが故に余の考へにては女子の高等教育は之と宣教師社會に託するの外別に上手段はあらざるならむ。宣教師の少なき所は如何ともすべからざれども東京の如く各派の宣教師數多居るの土地に於ては其の宣教師輩が互に一致和合せむには五六の女學校と設立せむことは左のみ難さおとにはあらざるならむ。五六の女學校が東京府内にお出來むは東京府中の高等教育は其の學校にて全く引き受けることを得む。四五人の宣教師と其の夫人と二三人の日本人とが一學校の教授に従事せむには教授は其れで充分ならむ。教科は讀み書き、會話、裁縫、音樂等と専らとすべければ專門學科の教師などは決して入らざる所なり。若し理化學、博物學等の一班を知らしむることを必要とせば専門學者を頼み一月も一回若しくは二回其の學問上の談話と

爲して賞はむには其れで全く充分ならむ。今での専門學者にも婦人の改良を熱心に希望する如きもの退々多くなりたればかゝる仕事を最も快く引き受け呉れる如き者決して乏しくはあらざるならむ。かゝる學校が出来て教師の婦人若くは女宣教師が深切に生徒と取り扱ひ。授業の阿ヒ間若くは折々教師の宅へでも招きて懇ろよくらしの事や子供の育て方の事など教へながら開化人の品行風俗人情を聞き習はしめ見習はしめむよ、我が邦の婦人の有様を改良するも如何ばかりの益か有らむ。されば宣教師輩に向つて余の切お望む所は各地宣教師輩が互に和合一致して前の如き女學校と設けられて我が邦高等社會の女子教育と宣教師社會とて全く引き受けられむこと則ち是れなり。

(未完)

○ 物理學用普通臺

物理學上ノ試験ヲ施スニハ物体ヲ受ケ或ハ之ヲ持チ又ハ之ニ隨意ノ位置ヲ與フル等種々様々ノ變化ヲ要ス然ルニ完全ナル器械ノ最モ手ノ込ム所即チ最モ多クノ金

額ヲ要スル者ハ主トシテ右ノ如キ枝葉ノ装置ニ在リトス今茲ニ記載セントスル普通臺ハ獨逸國^{ミュンヘン}府大學講師エーデルマン氏ノ考案ニ係リテ僅少ノ器具ヲ以テ多數ノ要求ニ應スヘキ重寶ナル装置ナレハ中學校師範學校等ニ至極適當ト思ハル依テ圖ヲ以テ之ヲ示ス
↑左ノ如シ 村岡範爲馳

第一圖ハ普通臺ノ諸部分ヲ實物ノ四分ノ一ノ大サヲ示シ加フルニ其各部ノ目印ヲ以テスル者ナリ

● ハ鐵製ノ二本足ニテ真中^{マンナカ}ニ圓柱ヲ立ツ

b.d. ハ 同直徑ノ鐵柱(各二個)

○ ハ 同直徑ノ堅^{ゴム}製柱(二個)

○ ハ直徑少シク小ナル真鍮柱(三個)

f. ハabcdヲ持ツヘキ真鍮製ノ止^トメ金^{ガネ}(五個)

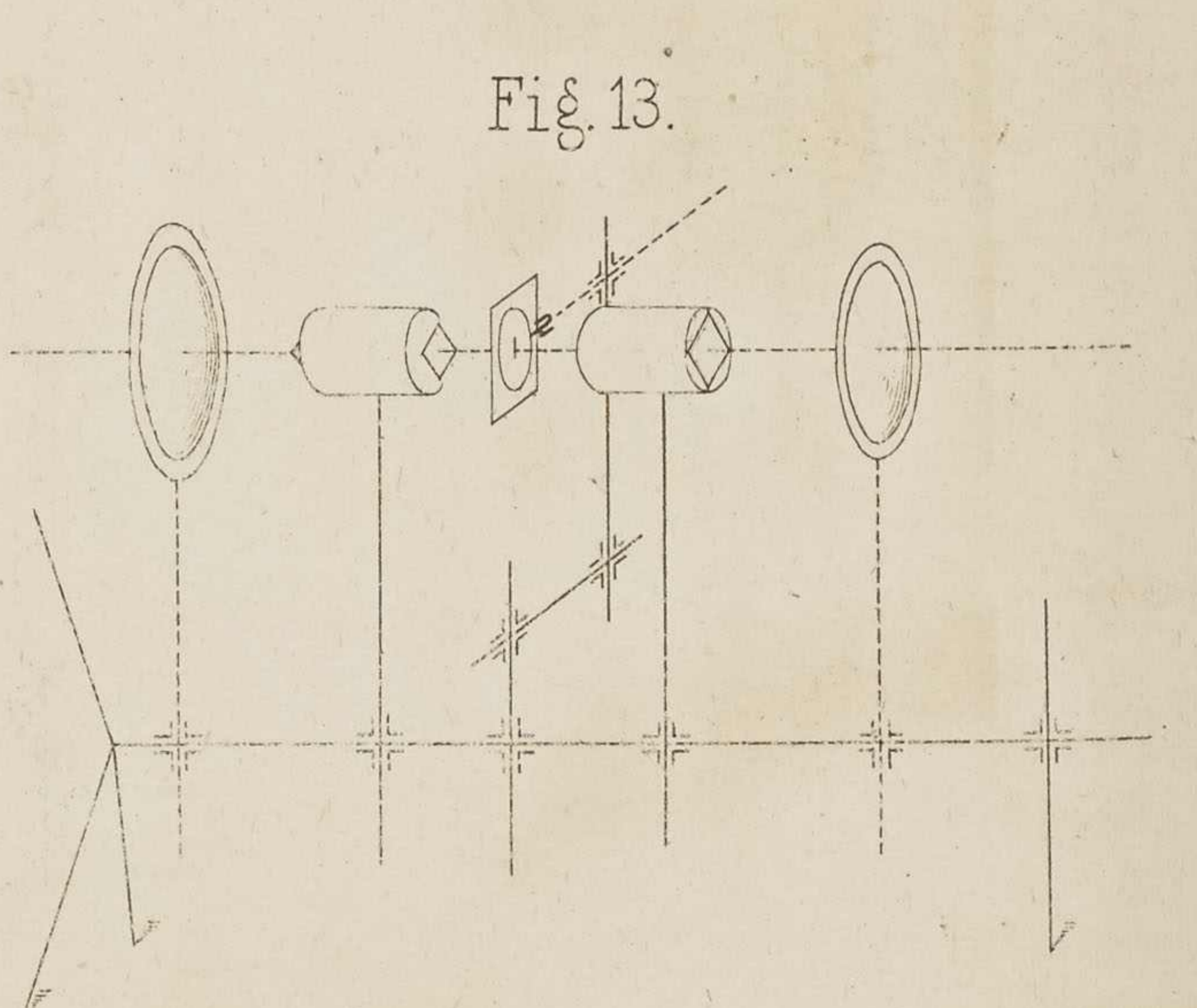
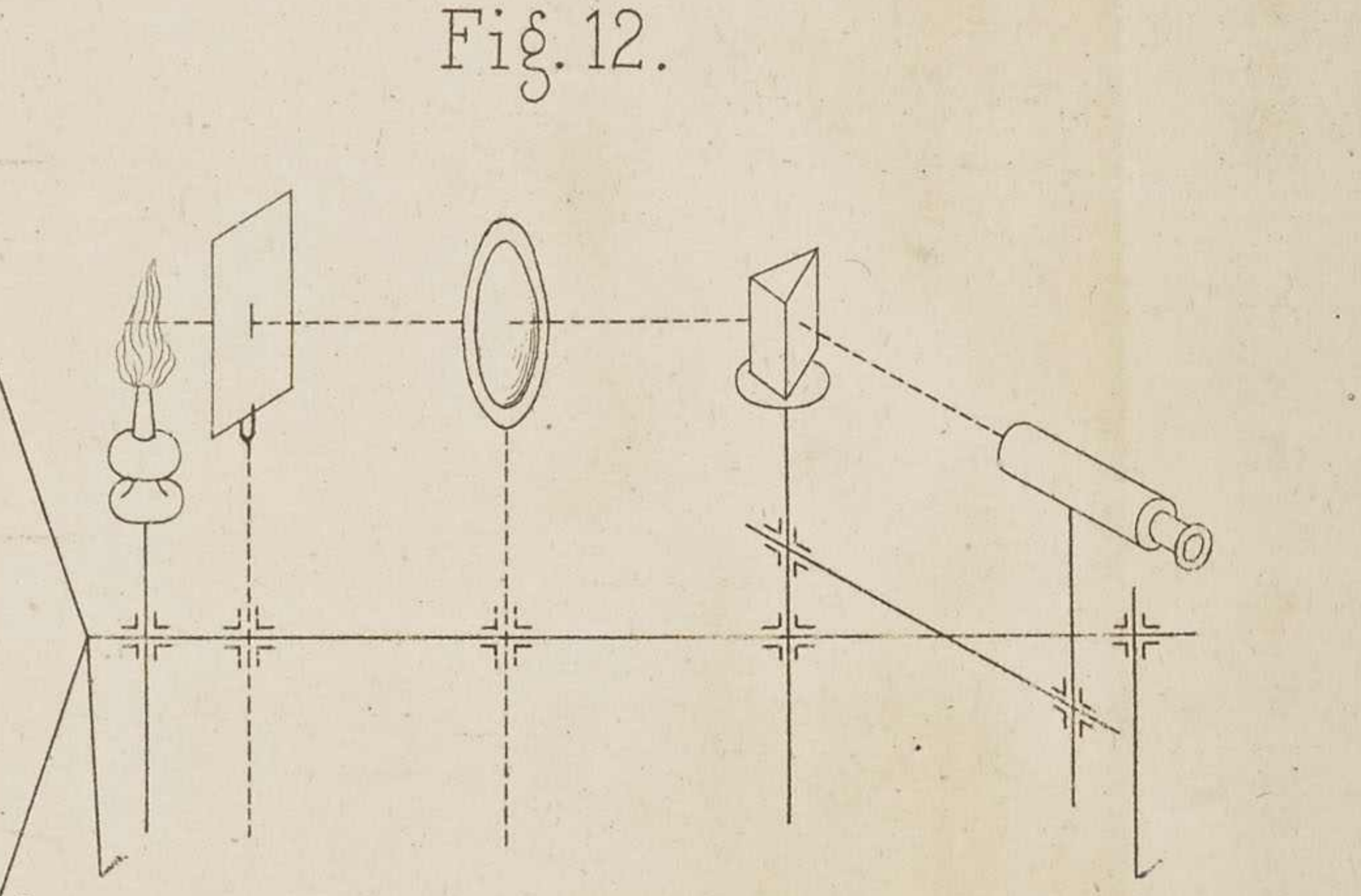
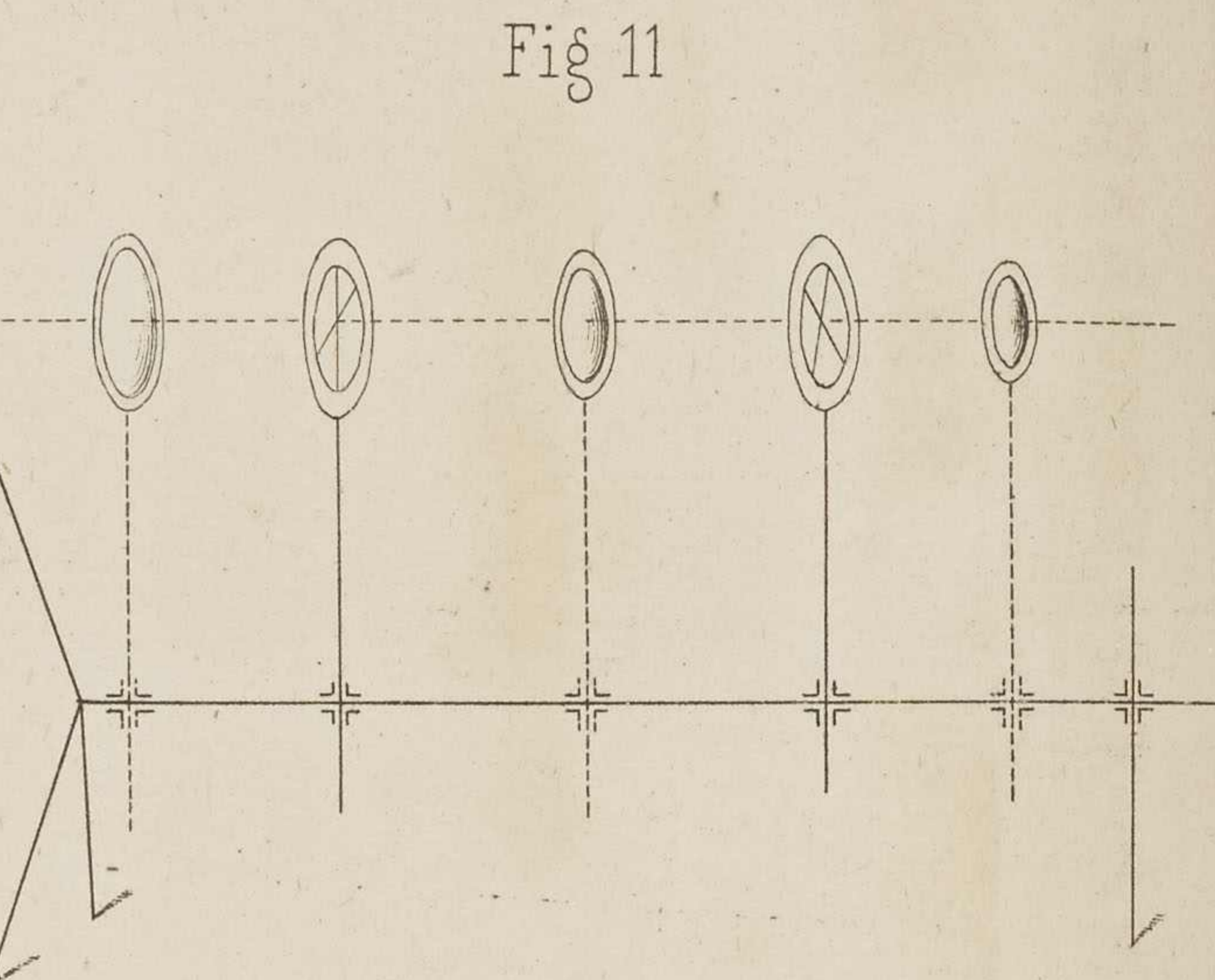
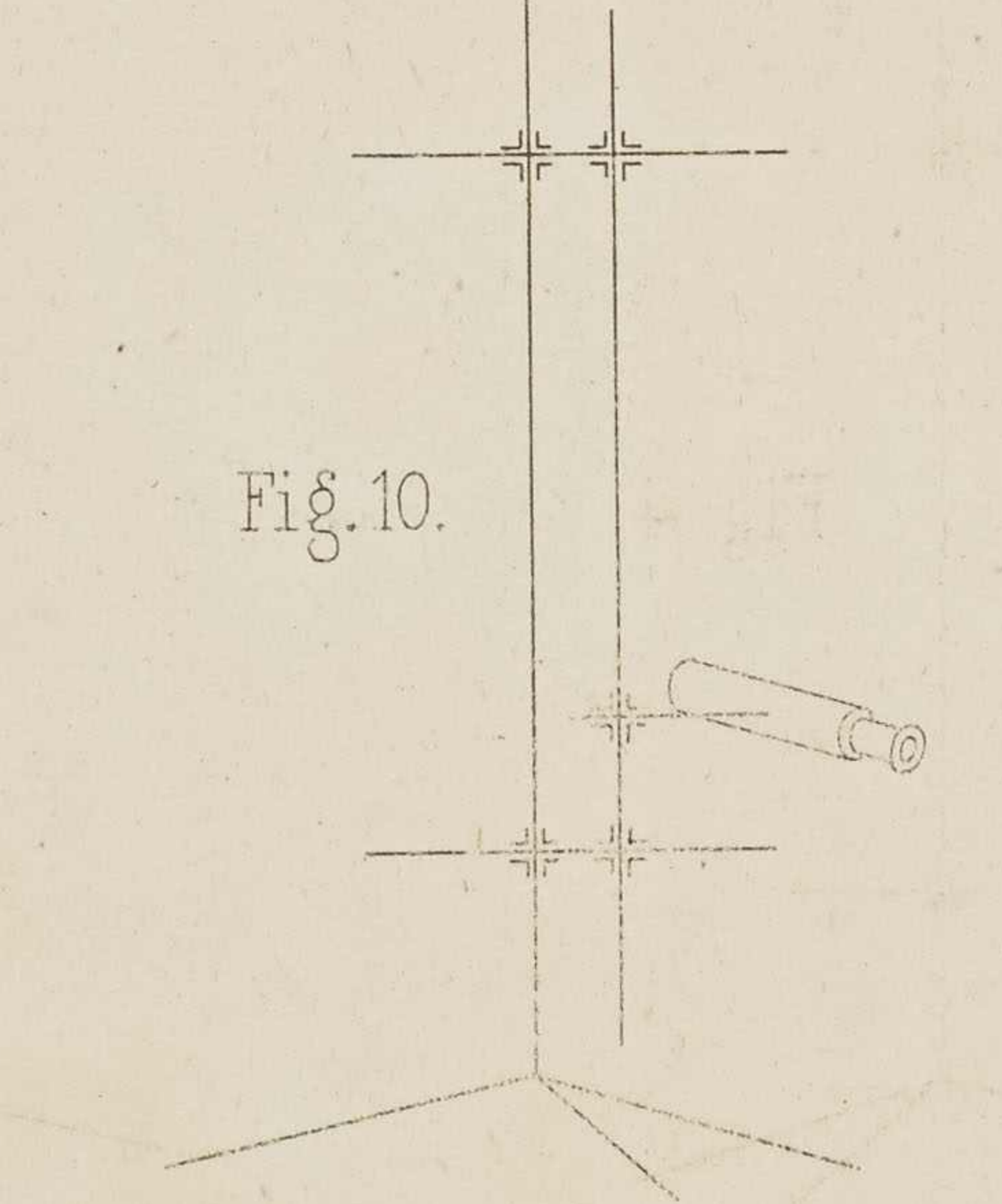
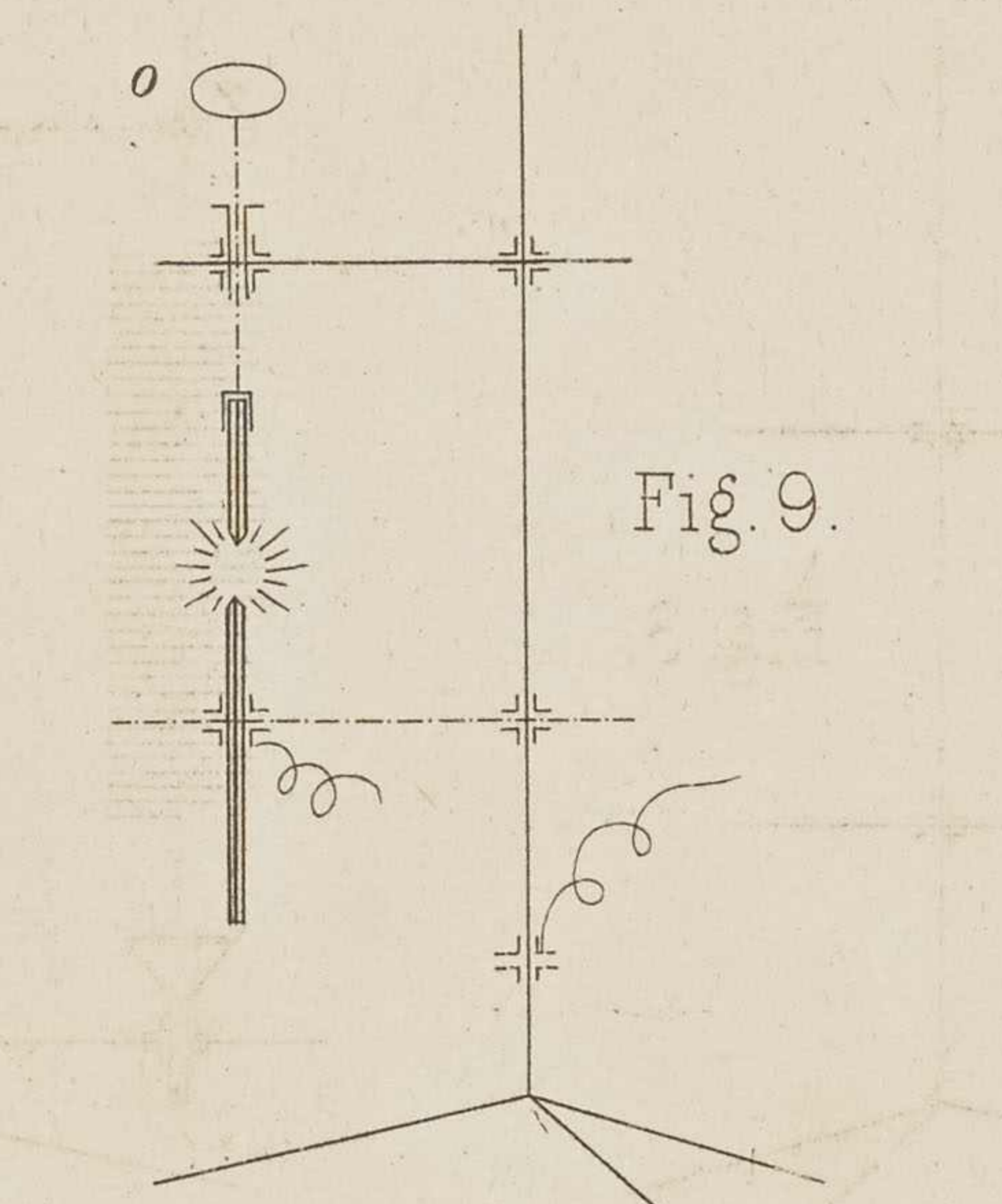
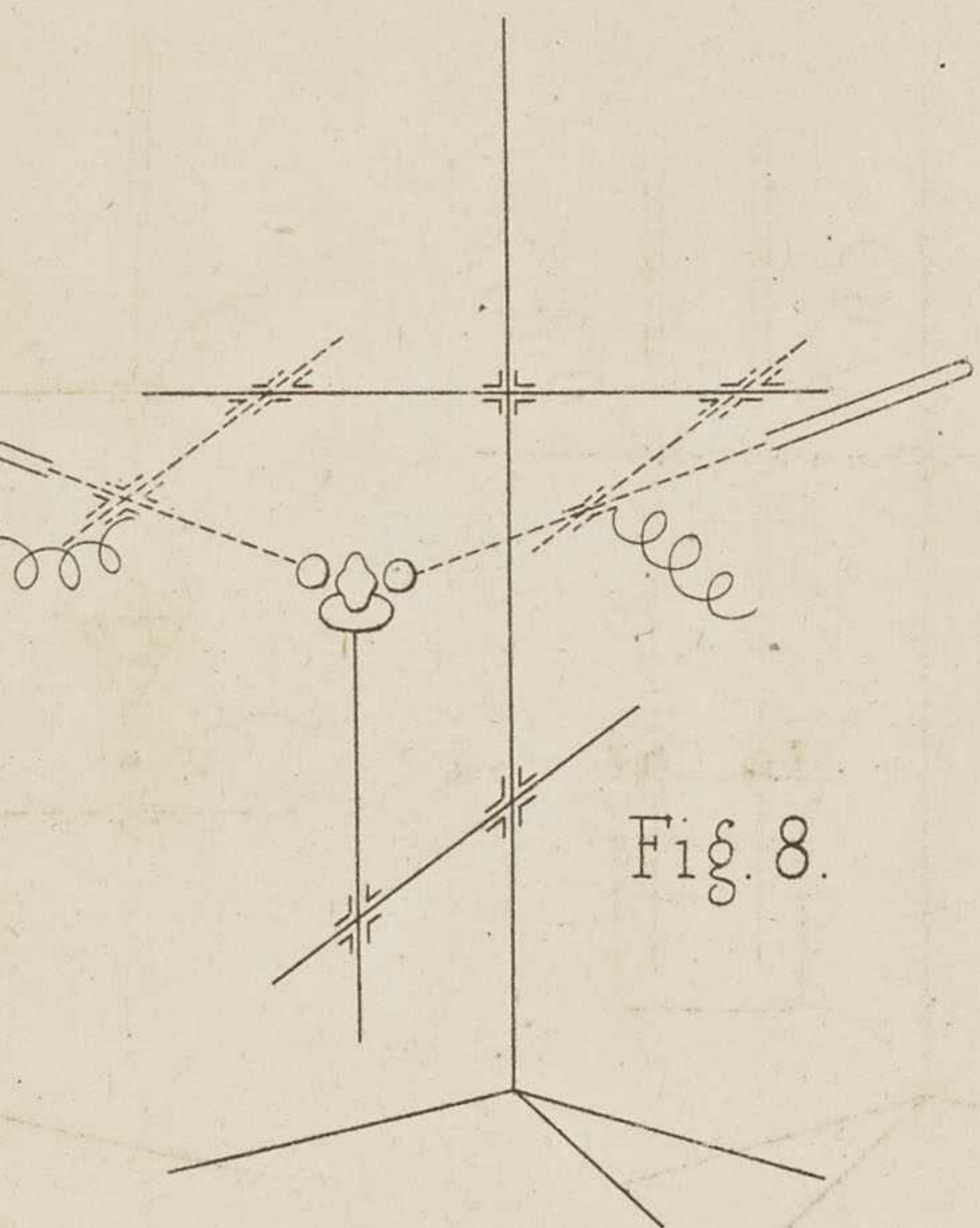
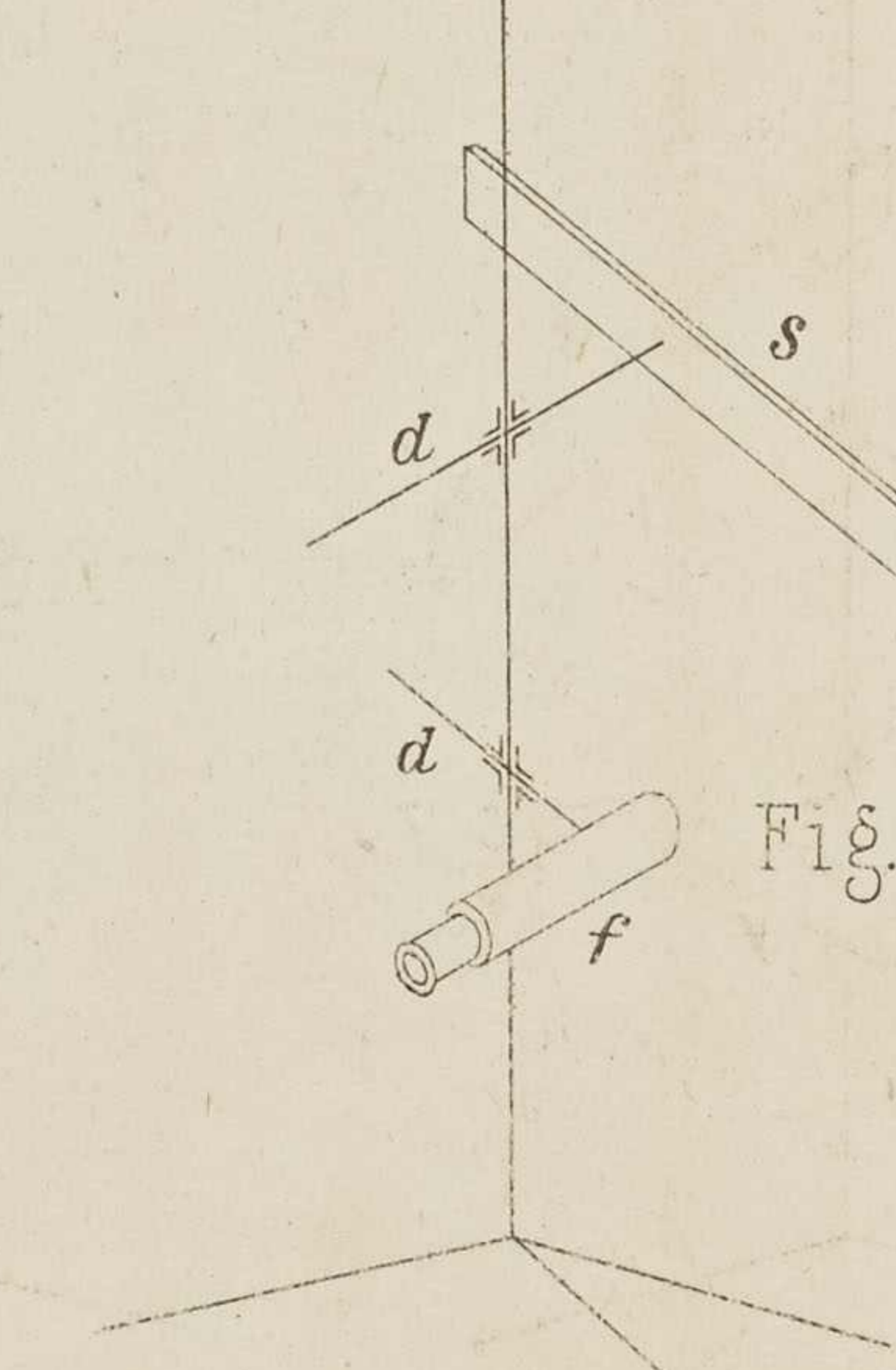
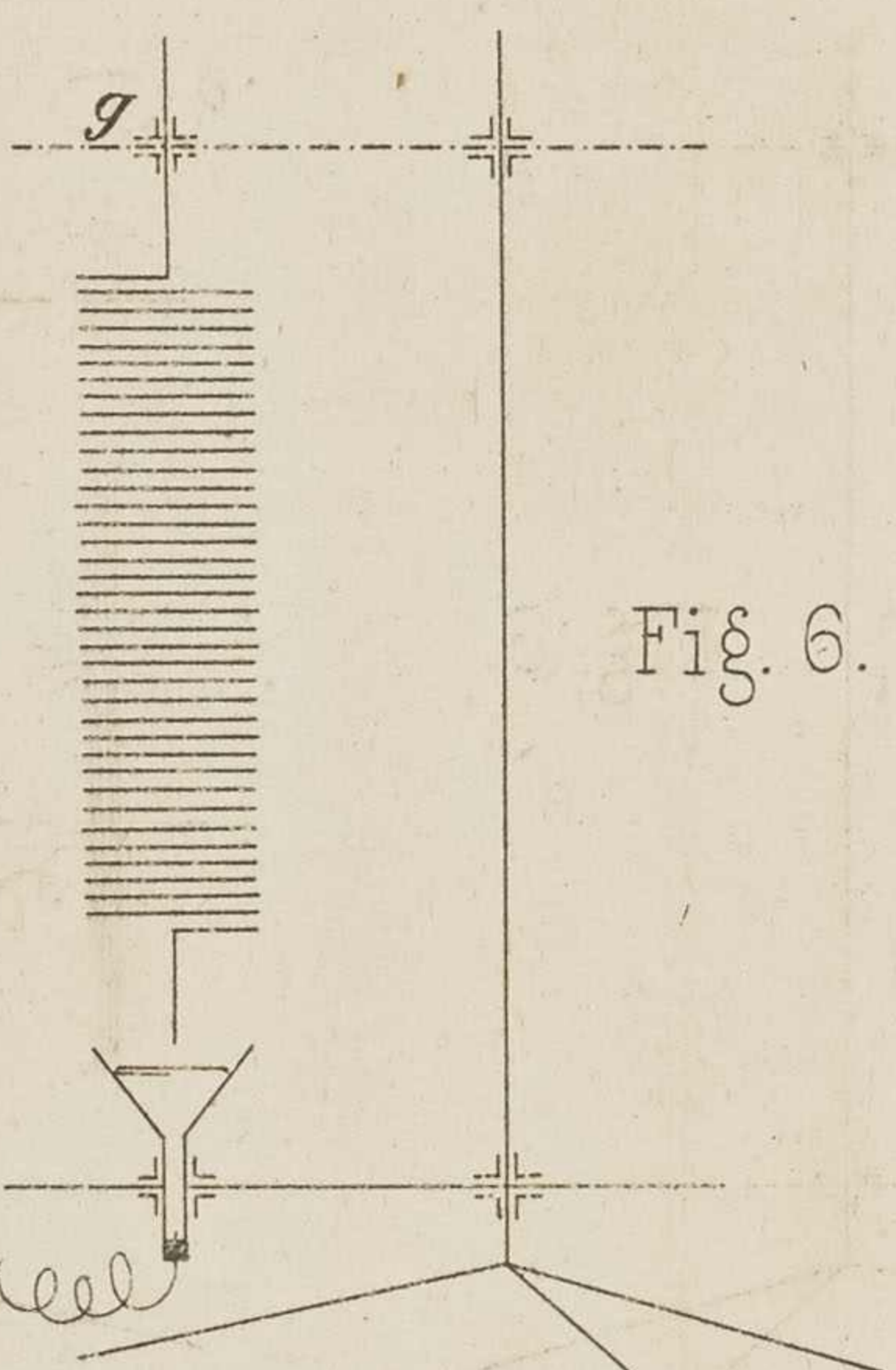
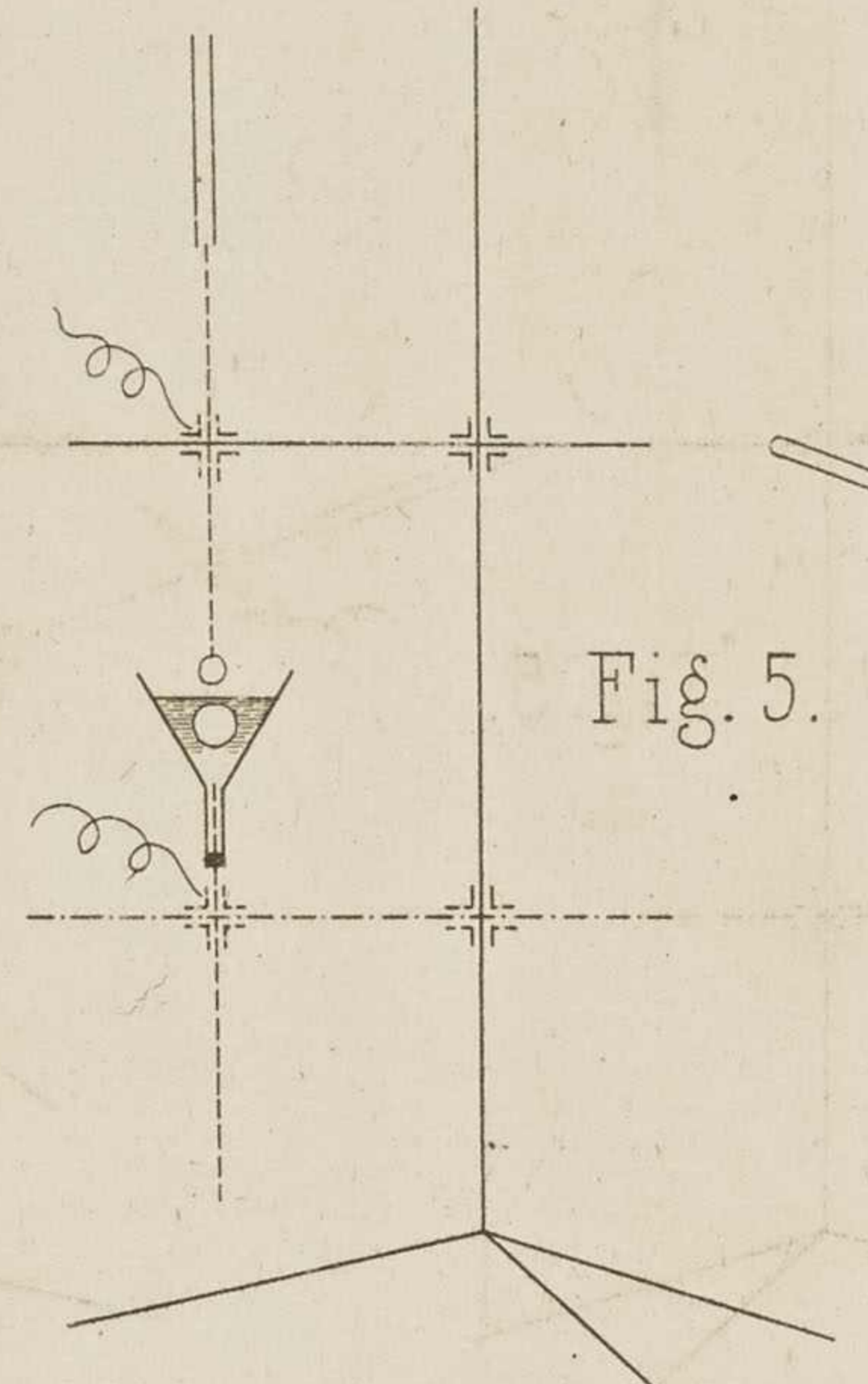
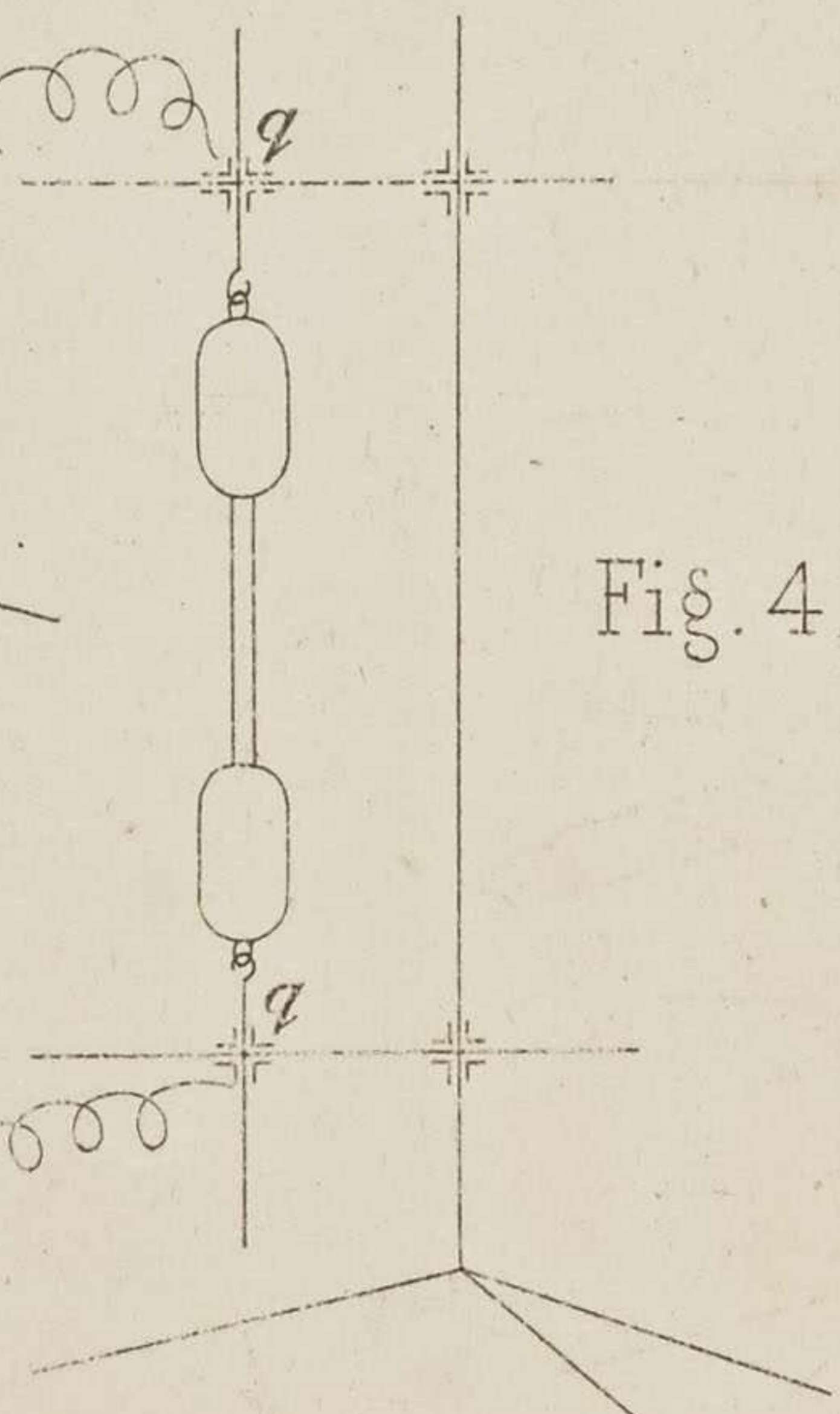
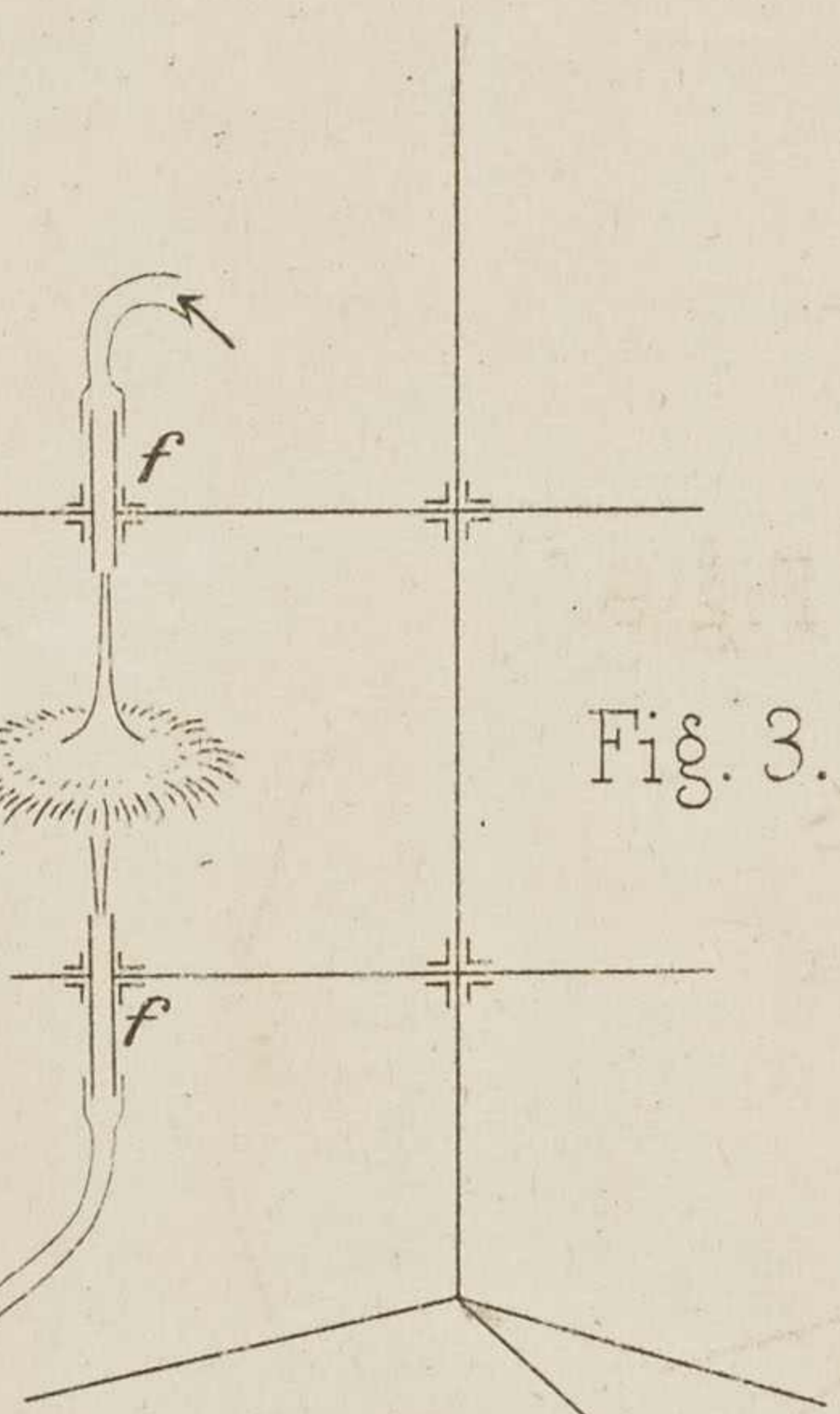
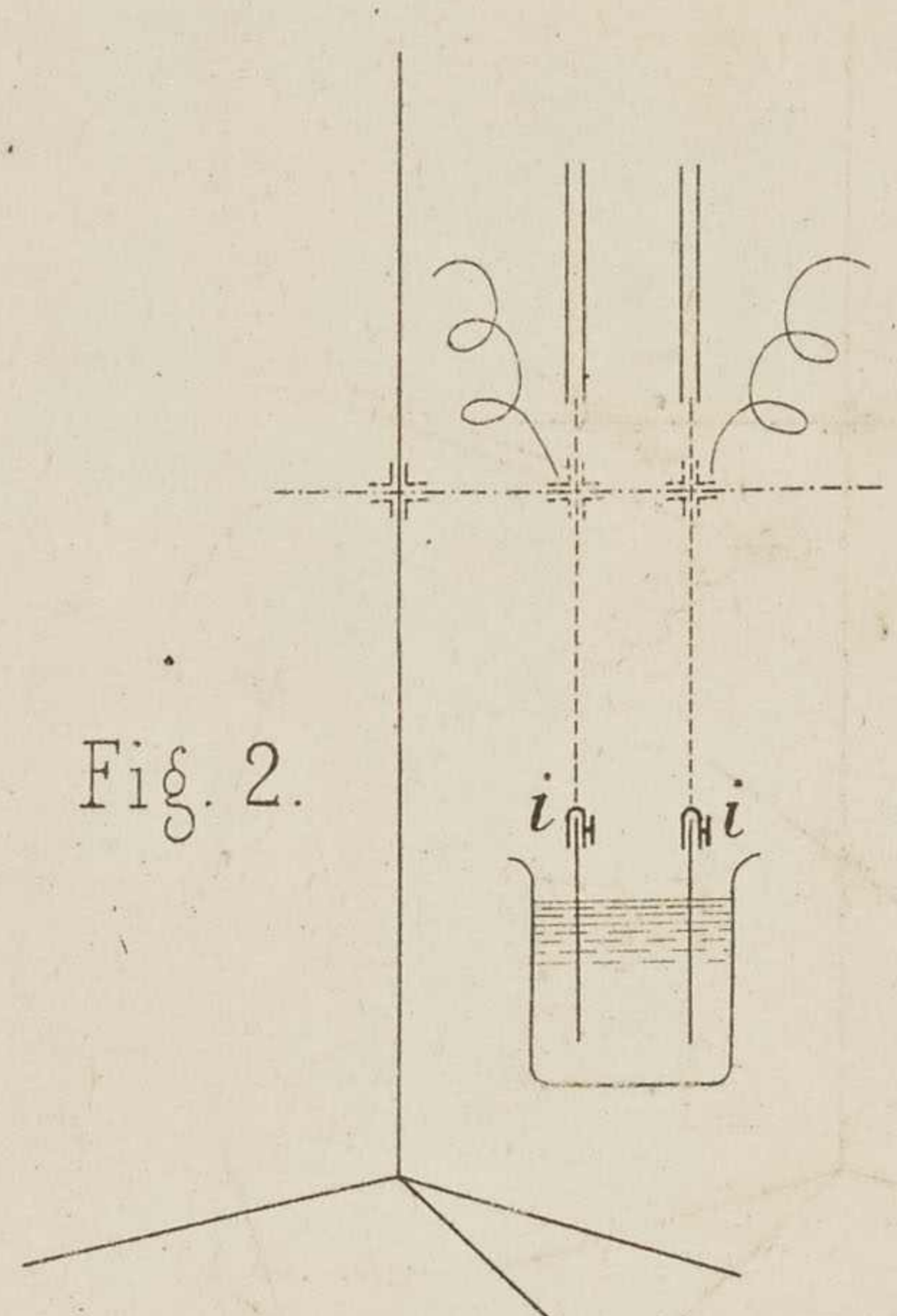
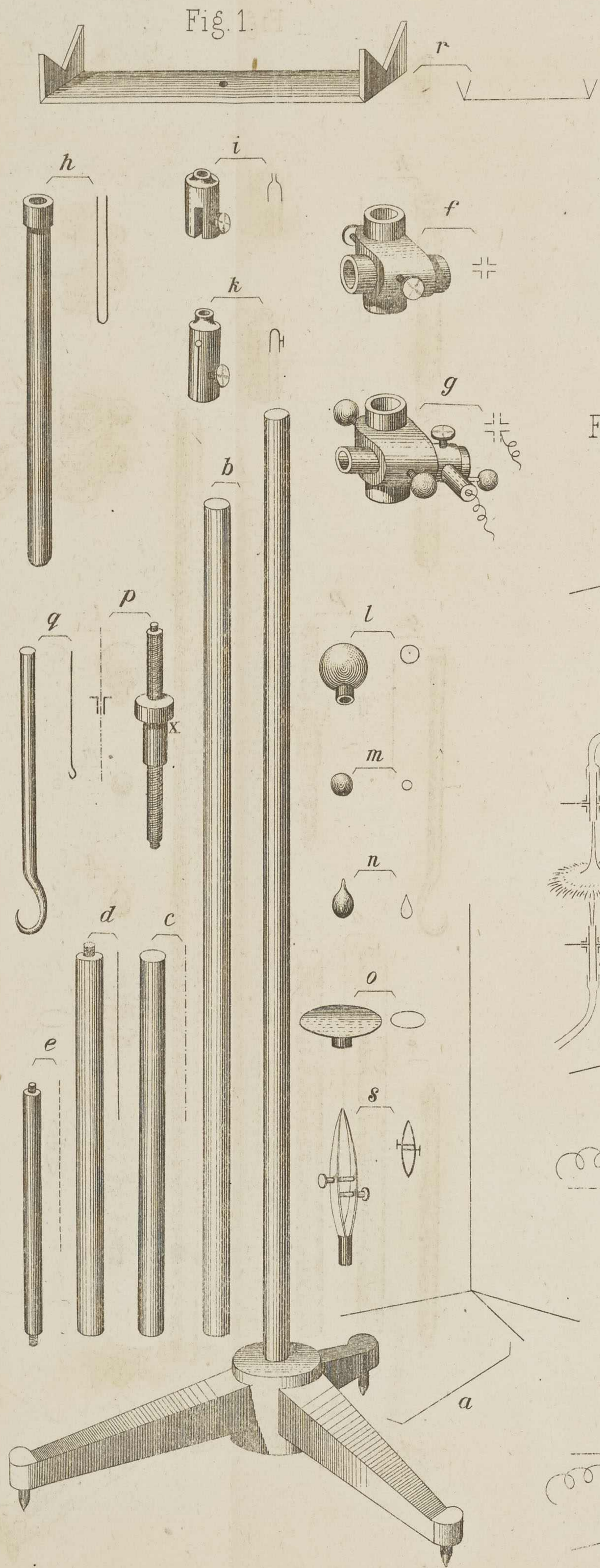
aa ハ○ニ合フ真鍮製ノ止^トメ金^{ガネ}ニテエレキ用ノ導線ヲ

挟ムヘク装置セリ(三個)

edd ノ端ニ具フル子ギ^ギニ合フ者ハ二^ニナル止^トメ子ギナ

リ(一及ヒ二^ニハ各二個)

mm ハ真鍮小球ニシテ dep ノ子ギニ合フ(各一個)



ルニ完全ナル器械ノ最モ手ノ込ム所即チ最モ多クノ金

目ハ眞鍮小球ニシテ Top ノ子ガニ合フ(各一個)

小坂のハハサミ
ハ絶縁管ハ
ハ管臺ニ
テ各
線之ニ對スル鏡ヨリ
反射スレハ
ハサミ以テ之ヲ望ミ
見レ



ハ小板^カハハサミ^ロハ絶縁管^ハ管臺ニシテ各
depノ端ノ子ギニ合フ

一 ナル子ギノメ子ギ^ハハ^ハノ穴ニ合フ

二 ハ小鈎ナリ(二個)

右ハ普通臺ノ各部ニシテ其數合シテ凡ソ四十個ナリ其使

用ノ法ニ至リテハ試驗者自ラ實地ニ就キテ知ルヘシ茲ニ

一二ノ例ヲ舉ケテ其便ヲ示サントス

第二圖ハエレキ分解ノ装置ナリ一ナル止メ子ギニハエ

レキトロードヲ挟ミ之ヲ分解スヘキ液体中ニ入ル

第三圖ハ二個ノ水線突キ合フ有様ヲ示ス者ナリ上下ノ止

メ金^{ガ子}ニハガラス管ヲ挟ミゴム管ヲ以テ之ニ水ヲ通ス

第四圖ハガイスレル氏管試驗ノ装置ナリ

第五圖ハエレキノ火花ヲ以テイーサルニ火ヲ付クル装置

ナリイーサルヲ入ル、ニハ漏斗ヲ用フル^ト圖ノ如シ

第六圖ハエレキ流自斷ノ装置ナリ即チ螺旋狀ノ導線ニエ

レキヲ通スレハ平行スル線互ニ相引クカ爲メニ線ノ距

離縮少シテ下端水銀ノ面ヲ離ル、ナリ

第七圖ハ望遠鏡用尺度ノ装置ナリ^ハナル尺度ヨリ出ル光

線之ニ對スル鏡ヨリ反射スレハ^ハヲ以テ之ヲ望ミ視ル
ヲ得ルナリ

第八圖ハエレキノ火花ヲ以テ火藥ニ点火スル装置ナリ

第九圖ハエレキ燈ナリ

第十圖ハ立尺^{カテトール}ナリ

第十一圖ハ望遠鏡中レンス及ヒ十文字線ノ装置ヲ示ス者

ナリ

第十二圖ハスペクトル計ナリ

第十三圖ハ光線^{カクヨリ}ノ偏^{ウツシエ}ノ現象ヲ寫繪仕懸^ニテ示ス装置ナリ

○

周易起源

明治十六年七月廿一日於倫敦 末松謙澄講述

會頭并諸君 頃日ハ幹事ヨリ一夕講義ノ徵アリ因テ何事

ヲカ講セント思慮スルニ西歐學術ノ談ハ諸君カ自ラ研究

スル所ナレハ反テ陳腐ニ屬セン幸ニ嘗テ聊カ支那易學ノ

起源ヲ搜索セシ^トアリ乃チ其旨ヲ以テ幹事ニ答ヘ遂ニ今

夕諸君ト此席ニ相見ルノ喜ヲ得ル^トトハナレリ幸ニ一聽

ヲ賜ヘ之ヲ周禮ニ案スルニ

大卜掌三易之法、一曰連山、二曰歸藏、三曰周易、其經卦皆八、其別皆六十四、

トアリ以テ古ハ易ニ三種ノ別アリシヲ見ルベシ連山歸藏ノ二易ハ今世ニ傳ラズ左傳襄公九年ニ遇艮之八ト云フ文アリ註釋家ハ八ノ字ニ說ヲ付ケ周易ハ六九ヲ以テ占ヲ立ツ八ニ之クトアレハ是レ古易ヲ用クル者ナルベシト論ズレト未タ以テ連山歸藏ノ如何ヲ悉スニ足ラズ周易ハ即チ今世ニ傳フル所ノ者ナリ史傳ニ據レハ秦ハ挾書律ヲ設ケ遂ニ古書ヲ焚クニ際シ易ハ卜筮ノ書ニシテ禁セザリシトアリ三易ノ出處未タ全ク明白ナラズ連山ハ伏羲ノ易ニシテ歸藏ハ黃帝ノ易トシ或ハ連山ハ夏ノ易ニシテ歸藏ハ殷ノ易トスル說アリ又三易名稱ノ義ヲ解シ連山ハ山ノ雲ヲ出シ連々絶エサルニ象リト云ハノヨリ山岳起伏重疊層出スルノ象アリト云フ歸藏ハ萬物其中ニ歸藏セザル無クニ若カサルニ似タリ周易ハ易道周普備ハラザル所ナキニ取ルト云フ說アリ又一說ニハ世譜等ノ群書ヲ案スルニ神農一ニ連山氏ト曰ヒ又ハ列山氏ト曰ヒ黃帝一ニ歸藏ト曰フトアルヲ見レハ并ニ是レ代號ナリ周易モ亦周朝ノ易ト云フ意ナリト論セリ

然レト此等ハ皆後世ノ推考ニシテ其實確証ノ考フベキ者アルナシ獨リ周易ハ其義ヲ周朝ノ易ト云フニ取レルハ是ニ近シ唯易ノ起源ハ周朝ニ創造セシ者ニハアラズ支那普通ノ說ニ據レバ伏羲始メテ八卦ヲ畫スト云フ繫辭傳ニ謂フ所

古者包犧氏^{同伏義}之王天下也、仰則觀象於天、俯則觀法於地、觀鳥獸之文與地之宜、近取諸身、遠取諸物、於是始作八卦、以通神明之德、以類萬物之情、

是レナリ繫辭傳又

河出圖、洛出書、聖人則之

ト云フ語アリ論語ニモ河不出圖トアリ書ノ顧命ニモ河圖在東序トアリ是ヲ以テ伏羲ノ八卦ヲ作ルハ河圖ノ文ニ則ルナリトノ說アリ蓋シ其說ニ曰ク河圖ハ伏羲天下ニ王タル時龍馬アリ圖ヲ負フテ河水ノ濱ニ出ツ伏羲遂ニ其文ニ則リテ八卦ヲ畫ス洛書ハ禹水ヲ治ル時神龜背上ニ文ヲ負タル者ヲ見ル文ノ數凡ソ九ツ遂ニ之ヲ次第シテ九類ヲ爲ス即チ書經ニ所謂九疇ニシテ箕子洪範ノ由テ出ル所ナリトシ而シテ前ニ所謂仰觀象於天俯觀法於地ト支吾セシメ

ニ是レ代號ナリ周易モ亦周朝ノ易ト云フ意ナリト論セリ

トシ而シテ前ニ所謂仰觀象於天俯觀法於地ト支吾セシメ

ザラントシテ卦ヲ作ルハ河圖ニ從フト雖モ猶仰觀俯察以テ相參正シ然ル後卦ヲ畫スルナリト説ケリ然レモ河圖洛書ハ支那名儒中ニモ信スルニ足ラズトスル者アリ假令之ヲシテ全ク妄誕ナラザラシムルモ亦猶鳥迹ヲ見テ文字ヲ造ルト云フノ類ナルヘシ龍圖龜文ヲ羅列シテ易象ト洪範トニ符合セシメントスルハ鳥迹ヲ尋テ一々文字ニ符合セシメントスルガ如シ朱子易學啓蒙載スル所ノ河圖洛書ノ圖ノ如キハ徒ラニ附會ノ想像ニ過ギスト知ルベシ然ルガ故ニ八卦ノ作ル所以ヲ釋ヌルニハ姑ク河圖ヲ舍テ可ナリ八卦ハ



是レナリ之ヲ重子テ六十四卦ト爲ス其之ヲ重タルハ誰タルカ亦甚タ考フ可ラズ司馬遷ハ周ノ文王ノ條下ニ

其囚羸里也、蓋益易之八卦、爲六十四卦、ト記ス之ヲ標據トシテ八卦ヲ重ヌルハ文王ナリトスルモノアリ又文王以前已ニ六十四卦アリトスル者アリ朱子ノ

如キモ周禮ノ經卦皆八其別皆六十四トアルニ據リ六十四卦ハ文王ヲ待テ漸ク成ルニアラズト論ゼリ是ニ近シ六十四卦各々繫辭アリ分テ卦辭爻辭ノ二ツトス傳十篇アリ彖傳上下、象傳上下、繫辭傳上下、文言、說卦、序卦、雜卦

是レナリ或ハ之ヲ易ノ十翼ト稱ス往時ハ卦辭爻辭共ニ文王ノ手ニ成ルト稱シ十翼ハ孔子ノ述作ニ係ルト稱ス故ニ易ハ三聖人ノ手ニ成ルト云フ語アリ三聖人ハ伏羲文王孔子ナリ伏羲卦ヲ畫シ文王辭ヲ繫ケ孔子之ガ傳ヲ作ルノ謂ナリ而ルニ外卦六四ニ

王用亨于岐山、
トアリ隨上六ニ
王用亨于西山、

トアリ益上六ニ
王用亨于帝、

トアリ明夷六五ニ
箕子之明夷、
トアリ左傳ニ韓宣子魯ニ適キ易象ト魯ノ春秋ト見テ

周禮盡在魯矣吾乃今知周公之德與周之所以王也、

ト云ヒシトアルヲ見テ爻辭ヲ以テ文王ノ作トスルハ不都合ナリト悟リ卦辭ハ文王ノ作ニシテ爻卦ハ周公ノ作ナリ單ニ三聖ト稱シ周公ヲ數ヘザレバ爻ヲ以テ子ノ業ヲ統ブル故ナリト云フノ說出タリ唯此等ノ說及ビ十翼ヲ以テ孔子ノ作ル所トスルニ付テハ猶熟考スベキ所アレバ今姑ク之ヲ略シ直チニ十翼中ニ言フ所ニ基キ周易卦爻ノ組立ヲ述ブベシ

抑々易トハ天地萬物ノ變化消長ヲ指ス者ニシテ孔穎達ハ

易者變化之總名、改換之殊稱、

ト註セリ遂ニ其理ヲ收縮シテ書契ニ著シト筮ニ入ル者ヲ同ク稱シテ易ト曰フ繫辭傳ニ曰ク

天地設位而易行乎其中矣、

又曰

夫易廣矣、大矣、以言乎遠則不禦、以言乎邇則靜而正、以言乎天地之間則備矣、

又曰

乾坤者其易之緼乎、乾坤成列、而易在其中矣、乾坤毀

則无以見易、々不可見、則乾坤或幾乎息矣、

繫辭傳冒頭ニモ天尊地卑、乾坤定矣、トアレバ爻ニ謂フ所ノ乾坤ハ陽ニ易卦ノ乾坤ヲ說クトハ云ヘハ實ハ眞天地ヲ兼テ說ク故ニ乾坤成列而易在其中矣、ハ天地設位而易行乎其中矣、ト同義ト思ハル此數語ノ如クナレバ易ハ天地ト其生死存亡ヲ同クスル者ニシテ天地ノ理即チ易ナリ揚子雲モ說天者莫辯乎易ト說ケル如ク卦爻書契ハ直チニ其理ヲ寫ス者ナリ故ニ繫辭傳ニ

易有大極、是生兩儀、々々生四象、々々生八卦、

トアリ以テ其義ヲ見ルニ足ルガ如シ大極トハ希臘理學ニ所謂アークイー老子ニ所謂道ナリ莊子ガ道在大極之前ト說ケルハ自ラ一別說トス極ノ字義ハ尊大以テ加フルナキノ意ナリ洪範ニ所謂皇極民極ノ極是レナリ蓋シ大極トハ渾沌極至ノ理ヲ指シテ云フ者コテ之ヲ形容シ之ヲ分解セント欲スルモ得ヘカラス老子ノ所謂無狀之狀、無象之象、獨立而不改、周行而不殆、ト云フモノ是レナリ(老子象之章)曰有物混成、先天地而生、寂兮、寥兮、獨立而不改、周行而不殆、可以爲天下母、吾不知其名、字之曰道、贊之章曰視之不見、名曰夷、聽之不聞、名曰希、搏之不得、名曰微、此三者不可致詰、故混而爲一、其上不皦、其下不昧、繩々不可名、復歸於無

物、是爲無狀之

地、變通莫大乎四時トアルニモ能ク照應スル)以テ見ル

物、是爲無狀之
狀、無象之象、故ニ周茂叔ハ大極ハ即チ無極トマデ評

セリ朱子易學啓蒙ヲ作り假リニ一大環形ヲ造リ以テ大極

ノ意ヲ表スノルヲ左圖ノ如

シ圖蓋シ周茂叔ノ造意ニ出

ヅ顧フニ大極得テ圖スベキ

ニ非ズト雖也強テ之ヲ圖セ

ント欲スレバ則チ圓形ヲ用

非ザルヲ得ス何トナレバ方

形若クハ三角等ノ異形ヲ以テスレバ圭角アリテ直チニ其

義ヲ失フ而シテ圓ハ物ノ停滯ナク圭角ナキノ意ヲ表スル

ニ足ルヲアレバ圓形ヲ用フルニ若ザルナリ大極アリテ而

ノ後兩儀アリ兩儀ハ乾坤即チ天地ナリ天地則チ陰陽ナリ

（兩儀ヲ指シ直チニ陰陽トスル說アリ單ニ大極生兩儀ノ
一句ノミナラシメハ直チニ陰陽ト見ルモ妨ゲナシト雖

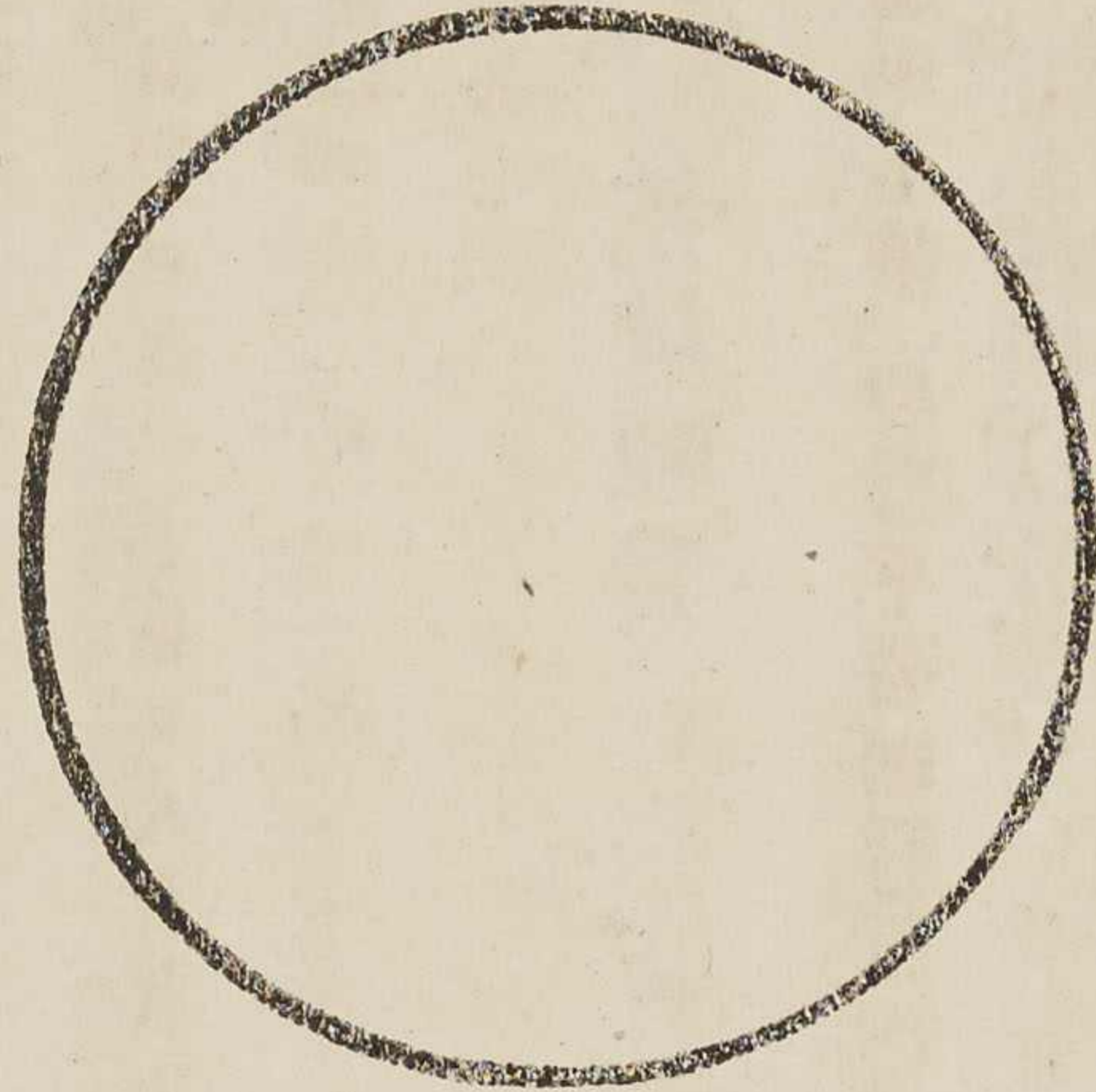
モ易ノ重テ乾坤ニ歸スルハ實ニ著ルシ乾坤成列易在其中

矣、易不可見則乾坤幾乎息矣トマテ論ズ作者大極之次ニ

出ル思想ハ必ズ乾坤ナルベシ乾坤ハ即チ天地ナリ且ツ三

卦ハ三才ニ象ルトアレバ兩儀ヲ天地トスル時ハ之ニ人ヲ

加ヘテ三才トナルユヘ互ニ相符合スルナリ否ラザレハ筮
法ヲ說ク所ニ分而爲二、以象兩掛一以象三、ノ解澁滯スベシ
兩ハ天地ナリ三八三才ナリ兩ニ一加ヘ三トナルナリ四
象生八卦ノ下ニ八卦定吉凶吉凶生大業是故法象莫大乎天



乾坤者其易之溫乎、乾坤成列、而易在其中矣、乾坤毀

夷、聽之不聞、名曰希、搏之不得、名曰微、此三者不可致詰、
故混而爲一、其上不皦、其下不昧、繩々不可名、復歸於無

地、變通莫大乎四時トアルニモ能ク照應スル
ナリ繫辭傳又廣大配天地變通配四時トモアリ）以テ見ル

ベシ徑チニ天地ト云ハズシテ兩儀ト云フハ其整然覆載萬

物ノ儀表トモナルベキ所ニ就キ其心情ヲ兼テ言フナリ

天地亦心情アリ象傳ニ

復其見天地之心乎

トアリ又

正大而天地之情可見矣

トアリ以テ見ルベシ希臘ノ理學ニハ大極ヲ立テ大極ノ次

ニ剛柔若クハ陰陽トモ譯スベキ反對ノ二力ヲ置キ天地萬

物ハ皆此二力ノ軋轉ヨリ生ズト論スル說アリ易ノ兩儀モ

或ハ然ラン歟ト反覆熟思シタレヒ易傳ノ全体ヲ通シテ覽

ル時ハ大極ト天地トノ間ニ陰陽ヲ插ミ有大極而後有陰陽

有陰陽而後有天地有天地而後萬物生焉ト云フエアラズシ

テ天地ノ初生ト陰陽ノ初動トハ恰モ同時ニ在リ天地ノ初

生ヲ以テ取りモ直サス陰陽ノ初動トシ陰陽ノ初動ヲ以テ

取りモ直サズ天地ノ初生トスルニ似タリ而シテ二者ヲ分


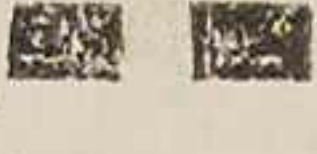
配スル時ハ天ハ陽ニシテ地ハ陰ナリ易卦亦大極生兩儀ニ

倣ヒ先ツ
ノ二畫ヲ作ル一ハ天即チ陽ヲ表シ
ハ地即

奇陰ヲ表ス  ハ單一ニシテ奇數ノ象アリ  ハ中斷シテ耦

數ノ象アリ而シテ繫辭傳ニモ

陽卦奇陰卦耦

トアル如ク天數ハ奇ニシテ地數ハ耦ナリ隨テ陽數ハ奇ニシテ陰數ハ耦ナリ故ニ  ハ天ヲ表シ陽ヲ表スルニ足リ 

ハ地ヲ表シ陰ヲ表スルニ足ルナリ已ニ天地アレハ則チ四時アリ彖傳ニ所謂

天地節而四時成

是レナリ之ヲ兩儀生四象ト謂フ四象ハ四時ノ象ナリ易卦

亦天地ヲ表スル所ノ二爻即チ陰陽二爻ヲ相乘若クハ自乘

シ四個ノ重爻ヲ得ルヲ圖ノ如シ



此四重爻ノ上ニ陽爻各々一ヲフレバ



乾坤離巽

ノ四ヲ得陰ヲ加フレバ



兌坤震坎

ノ四ヲ得併セテ八之ヲ四象生八卦ト云フナリ八卦各々名

アリ乾兌離震巽坎艮坤是レナリ一ヲ加ヘテ三トナスハ下

ニモ詳説スル如ク天地ニ人ヲ加ヘ天地人ノ三才ニ象ルナ

リ其ノ異様ノ新爻ヲ加ヘスシテ直チニ陰陽二爻ヲ流用セ

ルハ人ハ天地ト併ンテ三才ト稱スト雖ニ猶是レ生チ天地

ノ間ニ受ク故ニ一步ヲ天地ニ讓ルナリ己ニ八卦アリ則チ

八卦兩々相乘シ六爻一卦ト爲ス時ハ八卦各々他卦ニ乘ス

ルヲ七自乘ニ乘スルヲ一併セテ各々八因テ八々六十四ト

ナル(六十四卦中各卦各々十六アリ)是レ六十四卦ノ出所

ニシテ筭數上然ルナリ洋語ニハツライグラム(二線卦)ヘ

キサグラム(六線卦)ノ字アリ漢語ニテハ三爻ヲ以テ成ル

所ノ八卦ヲモ卦ト稱シ六爻ヨリ成ル所ノ六十四卦ヲモ卦

乾下 坤上



ト稱シ別名ナキハ稍混雜ニ似タリト雖ニ六十四卦ノ諸卦

ハ各々八卦ノ卦ニ合シタル者ト知ルヘシ而シテ下ナル

者ヲ内卦ト稱シ上ナル者ヲ外卦ト稱ス譬ヘハ

乾ハ内卦ニシテ坤ハ外卦ナリ六十四重卦各々名アリ乾坤

屯蒙需訟師比ノ類是ナリ其中内卦外卦同シキモノ八ツア

リ仍八卦ノ原名ヲ用フ譬ヘハ  乾下乾上仍乾

ト稱スル如キ是レナリ繫辭傳ニ據レハ三爻ハ天道地道人

道ニ象ル者ナリト云ヘリ已ニ三道アリテ之ヲ倍コス故ニ
六爻アリ繫辭傳ニ

易之爲書也、廣大悉備、有天道焉、有人道焉、有地道
焉、兼三才而兩之、故六爻者非它也、三才之道也

トアル是レナリ其ノ何故ニ之ヲ倍スル乎ハ其說說卦傳ニ
在リ曰ク

昔者聖人之作易也、將以順性命之理、是以立天之道曰
陰與陽、立地之道曰剛與柔、立人之道曰仁與義、兼三
才而兩之、故易六畫而成卦、分陰分陽、迭用柔剛、故易

六位而成章、

但シ天地ヲ以テ云ヘバ天陽地陰ナリト雖ヒ之ヲ分テバ天
地自家中亦自ラ兩箇ノ反對アリ天ニ在テハ之ヲ陰陽ト云
ヒ地ニ在テハ之ヲ剛柔ト云フ若シ一步ヲ進メ剛柔ト陰陽
トヲ比較スレバ陰陽二字ノ含蓄スル所ハ剛柔二字ヨリ多
ク自ラ天ノ地ノ上ニ在ルヲ表スト雖ヒ其實陽ハ剛ニシテ
陰ハ柔ナレバ易傳諸爻ノ体ヲ論スルヤ陰陽剛柔ヲ參互シ
テ稱呼スルヲ有リト知ルベシ將タ天道ノ陰陽地道ノ柔剛
ハ互ニ相反對スル者コシテ人道ノ仁義ノミ相反對スル者

アラズ陰陽柔剛ハ物理ヨリ立論シ仁義ハ德教ヨリ立論ス
論理ニ於テ稍穩當ナラザルニ似タリ善惡ト云ハ、或ハ可
ナラン惡ヲ以テ道トスルハ如何トノ嫌モアルベケレヒ爰
ニ所謂道トハ必ズシモ學デ之ニ遵フヲ教フル道トハ自
ラ別義ナルニヨリ人道ハ善惡トスルモ更ニ不可アルナシ
孟子ニモ道ニ、仁與不仁而已矣トアリ朱子ノ語ニモ大率
天下之道只是善惡而已トアリ以テ相徵明スルニ足ル且ツ
各卦各々其体ヲ異ニスルハ畢竟陰陽二爻ノ互ニ相代謝ス
ルナリ繫辭傳ニ

剛柔相摩、八卦相盪、

トアリ又

剛柔相推而生變化

トアル是ナリ剛柔ハ即チ陰ト陽トナリ之ヲ天地人三道ニ
分配シテ云フ時ハ陰陽柔剛仁義消長代謝シテ變化ヲ爲ス
ヲ謂フナリ繫辭傳ニ所謂

六爻之動、三極之道也

トアル是レナリ三極ハ即チ三道ナリ已ニ消長代謝ノ義ヲ
以テスル時ハ陰陽剛柔ハ適當ナリ仁義ノ二字ノ不適當ナ

ルヲ明ナリト雖也如此論理ノ不穩ハ支那書中ニハ珍ラシ
カラザレバ今強テ論スヘキニアラス
（森公使曰以予觀之、
仁義猶是反對物、蓋
人有相愛共救之性、有獨立自守之性、二者併存而爲人、
相愛共救仁也、獨立自守義也、謂之自他二性、亦仁義古
義如此、末松所論則儒者之仁義耳、謙澄曰、公使此論
似告子仁內義外之說、管桐南曰、佛書有自利利他之字、
與森公使所論相似、但）
未知與仁義二字相符否）
八卦各々天地山澤雷風水火ノ八
者ニ分付ス即チ

乾天 坤地 艮山 兌澤 震雷 巽風 坎水 離火
是レナリ故ニ六十四卦ハ各卦各々八者ノ二ヲ含蓄ス故ニ

說卦傳ニ

天地定位、山澤通氣、雷風相薄、水火不相射、八卦
相錯、

トアリ又一ニ乾ヲ父トシ坤ヲ母トシ其餘ヲ大中少男女ニ
配ス故ニ之ヲ父母六子ト稱ス說卦傳ニ據レハ其系左ノ如
シ



乾父



震長男

次中男

艮少男



坤母

離中女

巽長女

兌少女

己ニ六十四卦アリ而後六十四卦名アリ而後卦辭爻辭アリ
例ハ乾卦ノ經文

乾元亨利貞

ハ卦辭ニシテ

初九潛龍勿用

以下ハ爻辭ナリ彖傳專ラ卦辭ヲ說キ象傳專ラ爻辭ヲ說ク
ヨリシテ學者遂ニ卦辭ヲ稱シテ一ニ彖辭ト云ヒ爻辭チ一
ニ象辭ト稱ス繫辭傳ニ據レハ彖ハ猶材ノ如ク一卦六爻ノ
全象ヲ總括シテ說ク所謂材トハ衆材ヲ聚メテ一室ヲ造ル
ニ似タル義ニ取ルナリ爻ハ倣ノ義ニシテ爻辭ハ六爻陰陽
ノ變化シテ各種ノ卦トナルニ倣ヒ種々ノ異辭ヲ繫クルノ
意トス因テ之ヲ象辭ト云フナリ唯單ニ象ト云フ時ハ汎
ク卦爻變化ノ痕迹ヲ指ス者ニシテ必スシモ爻辭ノ變化ヲ
ノミ指スニアラズト知ルベシ否ラザレバ易傳ヲ讀ムコ於

テ通セザル所アルベシ繫辭傳説ノ所象象爻ノ解左ノ如シ

①彖者言乎象者也、爻者言乎變者也

②易者象也、象也者像也、彖者材也、爻也者効天下之動者也

爻也者倣此者也、象也者像此者也、

彖辭ハ一卦ノ全象ヲ統ブルガ故ニ繫辭傳ニモ之ヲ評シテ

知觀其彖辭、則思過半矣、

ト云ヘリ而シテ其見ル所ニ隨ヒ辭中元亨利貞吉凶悔吝無

咎ノ諸字ヲ插入ノ斷案トナシ以占筮ノ用ニ供ス繫辭傳ニ

繫辭焉、所以告也、定之以吉凶、所以斷也、

トアル是レナリ於是六十四卦已ニ成リ繫辭亦備ハル繫辭

傳ニ

聖人設卦、觀象、繫辭焉、而明吉凶、

トアリ又

象動於内、吉凶見乎外、功業見乎變、聖人之情見乎辭

トアリ又

道有變動、故曰爻、爻有等、故曰物、々相雜、故曰文々不

當、故吉凶生焉、

トアリ（註者曰ク物ハ物類ナリ爻ニ陰陽貴賤ノ等級アリ以テ萬物ノ類ニ象ル故ニ之ヲ物ト謂フ）又

八卦成別、象在其中矣、因而重之、爻在其中矣、剛柔相推、變在其中矣、繫辭焉而命之、動在其中矣、吉凶悔吝者生乎動者也、

トアリ又

夫象聖人有以見天下之賾、而擬諸其形容、象其物宜、是故謂之象、聖人有以見天下之動、而觀其會通、以行其典禮、繫辭焉、以斷其吉凶、是故謂之爻、極天下之賾者存乎卦、鼓天下之動者存乎辭、化而裁之存乎變、

トアリ又

八卦以象告、爻象以情言、剛柔雜居而吉凶可見矣、

トアリ以テ見ルヘシ而シテ爻辭ノ六爻ヲ歷舉スルハ下ヨリ上ニ及ボス初爻ハ最下爻ニシテ其上ナニトシ其上ナニトシ以テ最上爻ニ至ル陽爻稱シテ九ト云ヒ陰爻稱シテ六ト云フ故ニ最下爻陽ナレバ初九ト云ヒ陰ナレバ初六ト云フ其餘ハ陰陽ノ別ニ從ヒ或ハ九二九三九四九五ト云ヒ或六二六三六四六五ト云ヒ而シテ最上爻ヲ上九若クハ上六

六二六三六四六五ト云ヒ而シテ最上爻ヲ上九若クハ上六

長少男

ノミ指スニアラズト知ルベシ否ラザレバ易傳ヲ讀ムニ於

ト云フ例ヘバ乾卦ニ

初九、潜龍、勿用、九二、見龍在田、利見大人、九三、君子終

日乾乾

トアリ即チ此順序ヲ用ル者ナリ諸爻辭皆然ラサルハナシ
蓋シ易ハ一陰一陽次第ニ相生スルノ象ニ取ル生スル者ハ
基礎ヨリシテ出ツ故ニ最下爻ヲ基礎トシ順次ニ數ヘテ上
ルナリ又易ノ用ハ首トシテ將來ヲ窺フニ在リ故ニ說卦傳
ニモ

數住者順、知來者逆、故易逆數也

トアリ是レ亦以テ下ヨリ逆歷シテ上爻ニ至ルノ理ヲ發明
スルコ足ル(象傳ニモ飛鳥ノ上下ヲ論スル處ニ上逆而下
順也トアリ亦下ヨリスルヲ逆トスルナリ)

扱何故ニ六ト九トヲ以テ陰陽ノ異名ノ如クニ用ヒ來レル
歟ハ實ニ難解ノ一問題ニシテ之ヲ十翼ニ質スモ更ニ明解
ヲ見ズ唯說卦傳ニ

昔者聖人之作易也、々、々、々、參天兩地而倚數、

トアリ六十四卦ノ組立ハ皆此二數ノ乘ニ成ル先ツ兩儀ア
リ三爻卦アリ兩儀ハ二ナリ兩儀四象トナル二々ノ乘ナリ

(2x2)兩儀アリテ一重卦アリ重卦ハ六爻ナリ二三ノ乘ナ

リ(2x2)又三爻卦ニヲ重子一重卦トナスモ亦六爻トス三

二ノ乘ナリ(2x2)六九ノ數亦參天兩地ノ乘數ニ出ルニ似

タリ二ト三トニ乘スルニ各々三ヲ以テスレバ六ト九トヲ

得三ニ二ト三トヲ兩次ニ乘スルモ亦六ト九トヲ得(2x2)

(2x2)六ト九トハ奇耦ノ兩數タリ其三ニ乘スルニ二

ト三トヲ以テシ若クハ二ニ乘スルニ二ト三トヲ以テセザ

ルハ二ニ二ハ四二三ハ六ニシテ兩ナガラ耦數ナレバナリ是

レ第一義ナリ又六ト九トノ比例ハ猶二ト三トノ如シ(2:3

::3:2)而シテ六ト九トノ數ハ二ト三トニ乘スルニ各々

三ヲ以テシタル者ナリ(2x2) (3x3) (2x3) (3x2)是レ第二義ナリ其ノ

之ニ乘スルニ三ヲ以テセルハ易ハ三ヲ以テ變化ヲ爲ス

多ケレバナナルベシ且又十以內ニ於テ再乘ニシテ最多ナル奇

耦數ヲ舉レハ耦數ハ六ニ若クハ無ク奇數ハ九ニ若クハ無

シ九ハ三三ノ乘(3x3)ニシテ六ハ二三ノ乘ナリ(2x3)

八ハ最多ノ耦數ナレモ二四ノ乘ナリ四ハ又二二ノ乘ナリ

(2x2)故ニ八ハ眞ノ再乘數ニアラズ其二五ノ

十ヲ取ラザルハ十八數ノ極ナリト雖モ其實十二至レバ己

ニ混成數ノ第一ニシテ眞ノ盛數ハ九ニテ定マリ盛數ト順

(10X10)兩儀アリテ一重卦アリ重卦ハ六爻ナリ二三ノ乗ナ

環數トノ中間ニ位ス是レ算術上ニテモ明カナリ是レ九ハ再乘奇數ノ最盛ニシテ六ハ再乘偶數ノ最大ナル者ナリ故ニ爻辭ニテ九ヲ陽ノ盛ナル者ニ配シ六ヲ陰ノ盛ナル者ニ配シ遂ニ陰陽ヲ代名スルニ至リシ者ナラン歟是レ第三義ナリ蓋シ數學ノ夙ニ支那ニ開ケタルハ復タ疑フベキニアラザレバ此等ノ思想ハ當時ニ在テ絶テ之レナシトスルヲ得ズ

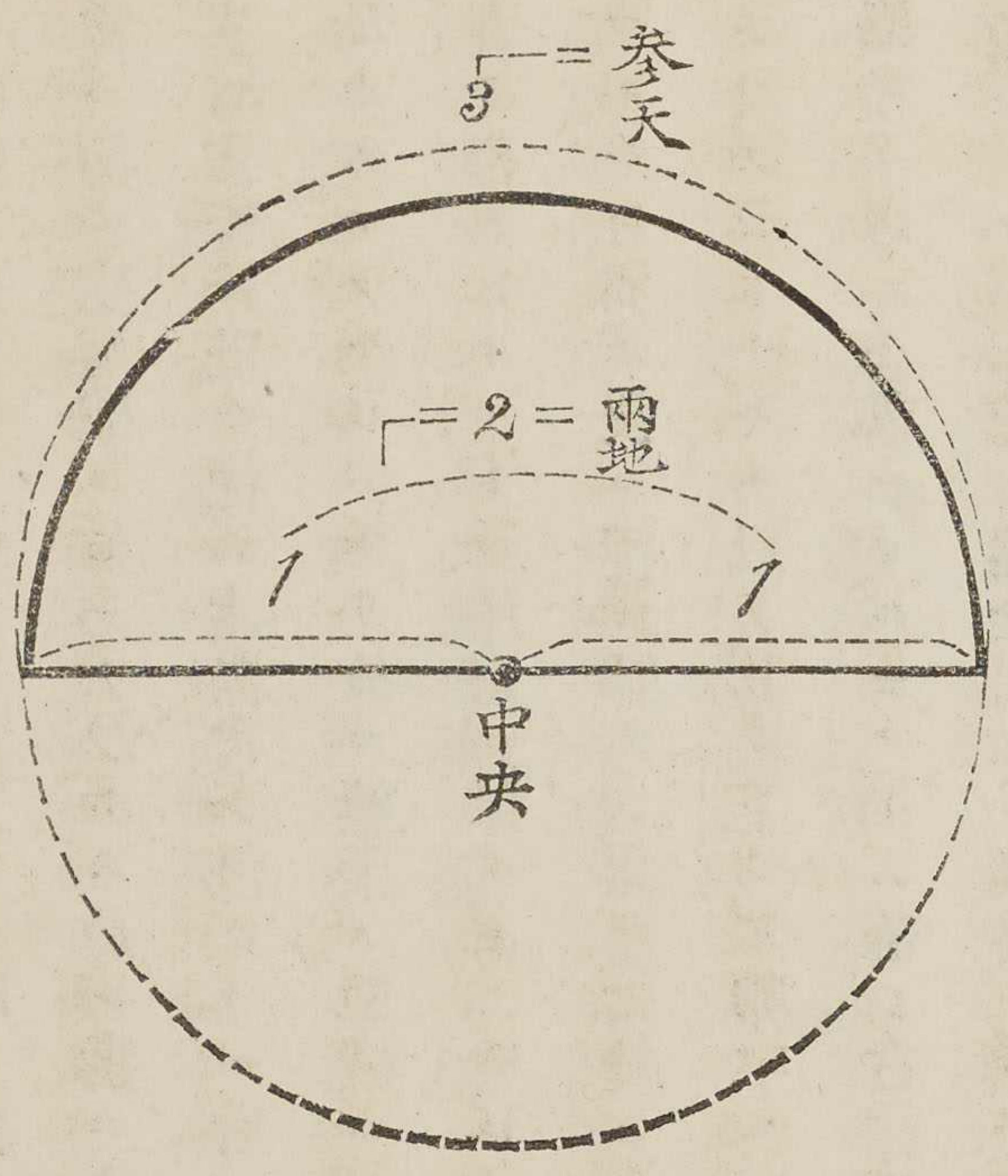
將又二ト三トヲ天地ニ分付シタルハ單ニ奇耦ノ二數ヲ取リタル而已ナラズ別ニ根據スル所アル歟ト問ヘバ之ニ答フルヲ容易ナラズト雖モ蓋シ亦圍三徑一ノ理ニ原クニ似タリ抑々圓形ノ直徑ト周圍トノ比例ハ千百年ヲ費スモ其ノ微細ノ極處ニ達スルヲ能ハザルハ算數家ノ知ル所ナリト雖モ其概切ノ處ハ猶一ト三トノ如シトハ支那算數家ニテ久シク人ノ言フ所ナリ

(西洋測圓算ニテハ經圍ノ比例ハ通例七ト二十二(22/7)トス即チ一ト三トノ比例ニ較スレバ徑七ニシテ圍一分ヲ加フ(即チ $\frac{22}{7} \times 7 = 22$) 而シテ支那ノ理學ニテハ天圓地方ト云フ語アリテ天ハ圓穹ニシテ覆フモノトシ地ハ方平ニシテ載スルモノトス之ヲ横切ノ圖ニ顯セバ天ハ半圓形ニシテ地ハ其ノ直徑線ニ似タリ直徑

ニ混成數ノ第一ニシテ眞ノ盛數ハ九ニテ定マリ盛數ト順

ノ一ヲ以テ周回ノ三ヲ二分スレハ一半ヲ得($\frac{1}{2}$) 故ニ地一ナレバ天一半ナリ而シテ一ト一半トノ比例ハ猶二ト三トノ如シ($\frac{2}{3}$) 故ニ成數ヲ以テスル時ハ天地ノ比例ハ二ト三ト如シ且ツ測量術ニ據レバ半徑即チ中央ヨリ周圍線ニ引ク線ヲ一ト立ツ半徑一ナレバ全經ハ二ナリ前ノ徑一圍三ニ各々二ヲ乘シ同比例トスル時ハ直徑二ナレバ周圍ハ六ナリ六ヲ半分スレハ三ナリ($\frac{1}{2} \times 6 = 3$) 故ニ半圓ハ三ナリ此理ヨリ推ス時ハ參天兩地ノ說モ絶テ據ル所ナキニアラズ

以下次號



○ 微粒子病之說

駒場農學校助教理學士佐々木忠次郎

蠶蛾ノ舉動活潑ナラサル者若クハ麥蛾^{ムキテウ}ト稱スル者ハ多少
 微粒子ヲ受ケタルコト明白ニシテ其産スル卵子モ亦必ス
 之ヲ遺傳スルコト明カナリ然レトモ舉動活潑ナラサル者
 コシテ微粒子病ヲ受ケタル者ニモ間々其産下セル卵子ノ
 半ハ該病ヲ受ケサルコトアリ是レハ一ベルラント氏モ亦
 能ク知ル所ナリ又強壯ナル蠶蛾ト雖モ微粒子ヲ受ケス
 ト言ヒ難ク從テ其産下セル卵子モ亦此病毒ヲ受ケザルト
 ハ証シ難カラシ然ラハ世人ハ不健康ノ蠶ハ勿論健康ノ蛾
 ノ産下セル卵子ト雖共ニ病毒ヲ受クル時ハ到底健全ノ卵
 子ヲ得ルコトハ難シト思フナルベシ然レトモ茲ニ一ノ良
 法アリ是レ他ナシ病蠶ハ固ヨリ之ヲ用ニ供シ難シト雖健
 全ナル蠶蛾ハ假令病毒ヲ受クルモ劇烈ナラサレハ其舉動
 及其軀軀面ニ病徴ヲ呈セサルナリ此ノ如キハ病毒ヲ受ケ
 タル日尙淺キ者ニシテ其軀内ノ諸器官ニハ病毒ヲ波及セ
 ス特ニ其生殖機ニハ毫モ病毒ヲ受ケサルニ因リ其産下セ

ル卵子ハ病毒ヲ遺傳セサルナリ然レトモ時ヲ經レハ軀内
 ノ諸器官ハ勿論生殖機ニモ之ヲ及ホス是レ實ニ微粒子毒
 ハ初メハ消食管ヲ侵シ從テ諸器官ヲ侵シタル后チ漸々生
 殖機ニ及ホヌモノナレハナリ故ニ健康ノ蠶蛾ニテモ全ク
 微粒子毒ヲ含蓄セサルトハ豫定シ難シトス然レトモ尙ホ
 之ヲ患フルヤ日尙淺ク從テ軀内ノ諸器官特ニ生殖機ニ
 ハ其毒ヲ及スコトナキヲ以テ其産下セル卵子ハ必ス健全
 ニシテ微粒子毒ヲ含蓄セサルモノトス蓋シ右蠶蛾ニテモ
 初メニ産下シタル卵子ハ健全ナリト雖終リニ産下シ若ク
 ハ夜付種ト稱スル卵子ハ如キハ該毒ヲ思フヘシ何トナレ
 ハ最初ニ産ミタル卵子ハ卵巢ノ被害如何ニヨリ病毒ヲ免
 ル、モ最後ニ産シタル卵子ハ病毒ヲ受クル理由アレハナ
 リ(蓋シ此理ヲ識ラント欲スル者ハ須ラク農學校ニ來リ
 問フベシ)

バストール氏ノ發明セル小室製種法ハ許多ノ日時ヲ耗費
 シ無量ノ手間ヲ要シ顯微鏡術ニ熟達セルモノ數人ヲ要セ
 サレハ到底爲シ得可キ事ニアラス且此法ニテ悉皆卵子内
 ノ病毒ヲ看破シ得ルト斷言シ難シ何トナレハ卵子中ニ含

ス特ニ其生殖機ニハ毫モ病毒ヲ受ケサルニ因リ其産下セ
ノ病毒ヲ看破シ得ルト斷言シ難シ何トナレハ卵子中ニ合

蓄セル微粒子ハ獨リ橢圓狀ノ者ノミナラスシテ尙ホ最微
ノ圓キ孢子ノ存スルコトアレバナリ

又ハーベルランド氏ノ說ノ如ク病毒調査ニ供スベキ卵子
ハ五粒宛之レテ十列トナシ一々之ヲ調査ノ病毒ノ有無輕
重如何ヲ調査スル法ノ如キモ亦微粒子ノ孢子ニ就キテハ
未タ論セシコトナク唯橢圓狀ノ微粒子ヲ調査スルノミニ
止マリ且ツ一頭ノ蠶蛾ヨリ無毒ノ卵子及有毒ノ卵子ヲ産
下スルコトアレハ概シテ之レヲ良法トハ言ヒ難シ但シ泰
西ニテハ本邦ノ如ク蠶卵ヲ厚紙ニ粘付スルコトナク野蠶
ノ卵子ノ如ク一合若クハ二合ヲ一纏ト爲シ之ヲ蓄ヘ置ク
由ナレハ本邦ニテハ概シテ卵子ハ厚紙ニ粘付スルモノナレ
ハ自然調査ノ法モ彼ト異ニセサル可ラス依テ種紙ヲ調査
スルニ當リ其面ヲ五十區若クハ百區ニ分チ每區ヨリ數粒
若クハ數十粒ノ卵子ヲ撮リテ之ヲ調査セハ橢圓微粒子ハ
視察シ得ヘケレトモ圓狀孢子ニ至テハ之ヲ識ルコト能ハ
サル可シ或ハ橢圓微粒子アルモ徒ニ看過スルモ尠カラサ
ルベク且ツ又一頭ノ蠶蛾ハ五分平方若クハ一寸平方内ニ
必ス卵子ヲ産ミ落スモノニアラス或ハ右ノ區域外ニモ産

卵スルコトアリ健康ノ蠶蛾ト雖其産下セル卵子ニハ有毒
無毒相半バスルコトアレハ是レ唯ニ良法ト言フニ過ギザ
ルノミ若シパストール氏ノ說ノ如ク五拾個若クハ百個ノ

小室ヲ製シ置キ先ツ雌雄ノ蛾ニ交尾セシメ后チ雄ハ撮リ
テ囊ニ入レ雌ノミ一頭ツ、一室内ニ入レ産卵セシメ然ル
后此蛾モ先キニ雄ヲ入レタル囊中ニ入レ從テ卵子ヲ檢點
シ雌雄ノ蛾ヲ調査ノ被害無害ノ卵子ヲ辨別スルノ說ハ甚
ダ其當ヲ得タル良法ト謂ツヘシ然レトモ其方法ヲ行フニ
ハ充分ノ注意ト充分ノ時間ト充分ノ顯微鏡ト顯微鏡術ニ
熟達ノ監督者ト顯微鏡調査ニ從事スヘキ人員ヲ要シ且ツ
右方法ニテ得タル蠶卵ノ價額ハ尋常ノ蠶卵紙ト大差ナキ
様ニ爲スコト甚緊要ナリ若シ右ノ諸件ニ反スル時ハ良法
タリト雖敢テ佳ト稱スルニ足ラス且ツ小室製種法ニ由リ
得タル蠶卵紙ニシテ其中彼此被害ノ蠶蛾ノ産シタル卵子
アラハ必ス之ヲ切り取ラスンハアル可ラス若シ之ヲ切り
取ラハ一枚ノ蠶卵紙ハ數ヶ所ニ孔ヲ生スヘシ是レ見苦シ
キ事ナレハ孔ヲ生セサル様注意スヘシ又右方法ニテ蠶蛾
ヲ調査スル時ニ於テ猥リニ蠶蛾ヲ擦潰シ之ヲ顯微鏡ニ照

ラシ視ル時ハ大過失ヲ來スモノナレハ宜シク其調査ニ適
當ナル所ヲ撮リテ其ノミ調査スヘシ

微粒子病ハ獨リ蠶兒ノミニ寄生スルノミナラス他ノ蟲類

ニモ寄生スルコトアリ是レ歐洲諸學士モ主張スル所ニシ

テ毫モ疑ヒテ容レサル處ナリ故ニ可成的此等ノ蟲類ヲ攫

集シ適當ノ方法ヲ以テ撲殺セシムルハアルヘカラス然リ而

シテパストール氏ノ說ニ因レハ大氣中ニモ微粒子ノ浮游

スルモノアリテ以テ蠶兒ニ傳染スト故ニ微粒子病ヲ禦ク

ニハ蠶卵蠶兒蠶蛹蠶蛾ノミヲ檢點スルヲ以テ防禦シタ

リト謂フ可ラス何トナレハ該毒ハ蠶室蠶具ニモ往々固着

シ若シクハ蠶室内ニ浮游スルモノナレハナリ是レ蠶卵蠶

兒蠶蛹蠶蛾等ヲ調査シ微粒子病ヲ防禦スルノ方法ニ次キ

更ラニ充分ノ注意ヲ加ヘテ蠶室蠶具且ツ蠶室内ノ大氣如

何ヲ檢シ該病ノ隱伏セルモノヲ撲滅セサル可ラス之ヲ殺

スニハ藥品ノ力ニ據ラサレハ到底防ク可ラス又蠶具蠶室

ハ宜ク充分ニ清潔ニセベキヲ要ス又蠶室蠶具若クハ蠶室

内ノ空氣中ニ浮游セル微粒子ヲ防禦スルニハ既ニ種々ノ

方法アリ

即チコロナリア氏ノ說ニ因レハ「コロールガス」亞硫酸瓦

斯等ハ微粒子ヲ殺滅スルニ足ルト言フハーベルランド氏

モ亦「コロールガス」ハ有功ノ者ト爲セリ殊ニ礬石ト鹽酸

トヲ合セテ此瓦斯ヲ製シ以テ蠶室内ヲ薰スル事ヲ記載セ

リ然レトモパストール氏ハ此瓦斯ヲ以テ無功ノ者ナリト

曰ヘリ余モ亦其功能如何ヲ決定センカ爲メ硝子ノ小板上

ニ微粒子ヲ敷キ之ヲ純粹ノ「コロールガス」中ニ入レ置キ

タルコト數日間ナレトモ更ラニ微粒子ヲ殺スコトヲ見テ

其成績タルヤパストール氏ノ說ト符合セリ純粹ノ「コロ

ールガス」ヲ用フト雖無功ナルヲ以テ之ヲ考フレハ礬石

ニ鹽酸ヲ加ヘ僅々ノ「コロールガス」ニテ微粒子ヲ殺ス

コトハ到底能ハサル事ト信スルナリ木灰、亞硫酸水等

ハパストール氏之ヲ無功ノモノトシ「ケレチソート」ハエ

ムヒシアム氏又「ケレチソート」「フニツク」酸窒素瓦斯ノ

如キハパストール氏之ヲ無功ナリトセリ然レトモ佛國ニ

テハ尙ホ硫黃「タール」煤特ニ煤ノ如キハ有功ノモノト爲

セリト言フ余ハ「ケレチソート」「硫黃」「コロールン」「亞硫酸

瓦斯、鹽素瓦斯其他煤等」ヲ微粒子ヲ殺スニ足ルヤヲ試

ミシニ勘シモ功ヲ奏セズ又微粒子ヲシテ四十度内外ニ儲
 へ置クコト一晝夜ニ及ヒシモ死スルコトナク又華氏四十
 度乃至百六十度ノ熱ニ晒セシモ亦無功ナリ然レトモ二百
 度内外ナレハ之ヲ殺スニ足ル是ニ因テ之ヲ見レハ蠶具ニ
 附着スル微粒子ヲ殺サンカ爲メ之ヲ夏日ノ炎天(夏日炎
 天ノ温度ハ平均華氏百十二度)ニ晒スモ微粒子ヲ殺スニ
 足ラサルナリエムテウクロー氏ハ寒中卵子ヲ冷水ニ浸ス
 コトハ之ヲ強壯ナラシムルノ法ナリト主張セリ此說誠ニ
 善シ且ツ水ニ浸ス時ハ或ハ殻ニ附着スル微粒子ヲ洗ヒ落
 ス事アレトモ卵子内ニ含蓄スル微粒子ハ到底殺スコト能
 ハサルヘシバストール氏ハ微粒子ノ病毒ヲ豫防驅除スル
 ハ重要ナル事ニシテ即チ善良ノ蠶卵ヲ製スルニ在リトテ
 小室製種法ヲ發明シ以テ世ニ公ニ爲セリ而シテ且ツ曰ク
 小室製種法ニ依テ得タル蠶卵ハ大約一ヶ年ハ微粒子毒ヲ
 免カルト雖其翌年ニ至ラバ病毒ヲ免カル、コト能ハス
 ト是レ微粒子ハ大氣ニ憑仗シ來リ傳染シ且ツ顯微鏡調査
 ノ充分ナラザルトニ在リ夫レ蠶蛾蠶卵ト雖微粒子毒ヲ受
 ケタルコト甚タシケレハ容易ニ顯微鏡ヲ以テ之ヲ調査ス

ルコトヲ得ヘシ然レトモ其病毒劇烈ナラズシテ微粒子ヲ
 存スルヲ勘キ時ハ容易ニ看破シ難キナリ就中蠶卵内ニ含
 蓄スルノ微粒子ハ假令僅々タルモ之ヲ忽セニセバ其病毒
 ハ後來増殖スルモノナレハ其數ハ一二個ナリト雖之ヲ看
 破セズンハアルヘカラス之ヲ忽コシ又圓狀ノ微粒子
 モ看破スルヲ能ハサル時ハ到底其病毒ハ免レ難キナリ
 バストール氏言ハズヤ蠶蛾ニ一二個ノ微粒子ヲ存スルヲ
 視ルモ餘リ意トスルニ足ラスト雖卵子内ニ一二個ノ微粒
 子ヲ存スル時ハ決シテ用ニ供スルコト勿レト是レ其卵子
 内ノ病毒ノ怖ル可キヲ謂フナリ然リ而シテバストール氏
 ハ小室製種法ヲ以テ自ラ世ニ誇レリト難尙ホ老練ノ養蠶
 者ニテ養蠶法其宜キヲ得ルキハ假令顯微鏡ヲ用井サルモ
 小室製種法ニテ製セシ蠶卵ニ劣ラサル者ヲ得ヘシト云ヘ
 リコロナリア氏モ善良ノ卵子ヲ精選シ適當ノ取扱ヲ以テ
 蠶兒ヲ養ハミ微粒子毒ヲ免ル、コトヲ得ヘシト言ヘリ是
 レニ依テ之ヲ見レハ兩氏ハ共ニ小室種法ヲ行ハザルモ養
 蠶術ヲ精巧ニシ卵子ヲ製スルニ注意ヲ加ユレハ能ク善良
 ノ卵子ヲ得ヘシト言フニ外ナラザルナリコロナリア

氏モ亦此説ニ同意セリ此事實ニ賞スルニ堪ヘリ余カ父長
 淳モ此點ニ注意スルコト年アリ此概畧ハ己ニ前文ニ記載
 シタリ讀者ハ宜ク之ヲ參考スヘシ蓋シ小室製種法ノ如キ
 ハ之ヲ道理上ニ徵スル時ハ無比ノ良法ナリト雖之ヲ實際
 ニ徵シ觀ル時ハ其難キコト知ル可キナリ是レ他ナシ小室
 製種法ヲ施スニ當テ蠶蛾ヲ調査スルノ際單ニ之ヲ磨潰シ
 其汁液ヲ調査シテ微粒子ノ有無ヲ鑒別セントスル時ハ一
 蛾ヨリ得タル汁液ハ甚クトモ數十回ノ調査ヲ要セスハ
 之ヲ鑒別スルコト能ハザルヘシ斯ノ如キ調査ヲ爲ス時ハ
 一頭ノ蛾ニ就キ數時ヲ費スヤ必セリ然ル時ハ到底實地ニ
 行フテ益ナカルベシ蓋シ益ナキノミナラス猶ホ微粒子ヲ
 看遺スノ恐ナシト謂フヘカラス茲ニ又蠶蛾ヲ調査スルノ
 一法アリ他ニ非ス蠶蛾ヲ磨潰シ之ヲ調査スルニ代フルコ
 蠶蛾ヲ解剖シ其生殖器ヲ取出シ之ヲ顯微鏡ニテ調査スル
 コトナリ是レ亦時ヲ費スコトナリト雖尙ホ蠶蛾ヲ磨潰シ
 數十回之ヲ顯微鏡下ニ檢スルモノニ勝レリ是レトテモ多
 分ノ時ヲ費スヘク且ツ一枚ノ蠶卵紙ヲ製スルニ之ニ要ス
 ル蠶蛾ト雖二三名ニテ之ヲ調査スル時ハ少ナクトモ三四

日ヲ費サミル可ラス尙ホ又微粒子ヲ看遺スノ恐ナキ能ハ
 ス且又蠶蛾ハ雌雄共ニ檢點セサル可ラス何ントナレハ雌
 蛾若シ軀内ニ微粒子ヲ藏スルモハ之ト交尾セル雄蛾ハ假
 令病毒ナシト雖其卵子ニハ必ス病毒ヲ藏スベシ又雌蛾ハ
 病毒ヲ藏セザルモ雄蛾之ヲ藏スル時ハ卵子ニハ病毒ヲ容
 ル、コト或ハ無シトスルモ卵子ノ外殻ニ之ヲ附着スルコ
 トアレハナリ故ニ蠶卵紙ヲ調査スルニ當テハ獨リ卵子ノ
 内容ノミヲ查驗スルヲ以テ完全ナリトスヘカラス必ス先
 ツ其卵殼ヲ調査シ然ル後卵子ノ内容ヲ調査セサレハ病毒
 ハ免レ難キコト必セリ此法モ亦日時ヲ費スヘシ斯クノ如
 ク顯微鏡調査ニ時日ヲ耗費シテ尙ホ微粒子病ヲ看遺ス恐
 レアル時ハ顯微鏡ヲ用ヰスシテ養蠶術ヲ精巧ニシ可成善
 良ノ種子ヲ取ルニ注意スルノ方法却テ前者ニ勝ル可シ則
 チ養蠶術ヲ精巧ニシ且ツ善良ノ卵子ヲ取ルニ勤ムル時ハ
 一モ微粒子ヲ患フルモノナシト斷言シ難シト雖其數ノ減
 少スルハ小室製種法ノモノト異ナルコトナクシテ時日ヲ
 費スモ敢テ僅々タルヘシ乃チ小室製種法ト養蠶術精巧ニ
 シテ善良ノ卵子ヲ取ルノ法其成績ニ至テハ畧ホ均一ナル

ノ説ハ歐洲諸學士及本邦實驗家ノ立論ニシテ又動カス可
ヲザルノミナラス尙ホ顯微鏡調査ニ因リテモ確然トシテ
誤謬ナキヲ証スルニ足レリ依テ余ハ養蠶術ヲ精巧ニシ善
良ノ蠶卵紙ヲ取ルハ微粒子ヲ防禦スル最上ノ良法ト爲シ
左ニ此方法ヲ記載ス

製種法

第一法 卵子ヨリ孵化セル者ハ一時ニ孵化スルモノヲ撰

拔シ後レテ孵化スルモノハ取棄ツベシ

第二法 蠶兒四眠起共ニ遅ク眠ニ就キ遅ク起キルモノハ

總ヘテ取棄ツベシ

第三法 蠶兒發生ヨリ結繭ニ至ル迄病蠶ト認ルモノハ盡

ク取棄ツベシ

第四法 蠶兒結繭ノ際期ニ後レテ結繭シ若クハ處々ニ徘徊

シ久シク結繭セサルモノハ盡ク取棄ツベシ

第五法 繭ハ大小ニ抱ハラヌ其質厚ク且繭内ノ蛹ハ健康

ナルモノヲ撰拔シ之レヨリ蠶蛾ヲ羽化セシムヘ

シ

第六法 蠶蛾ハ舉動活潑ニシテ趨シモ病徵ナク其軀軀ニ

モ趨シモ褐色斑ナキモノヲ撰拔スベシ

第七法 蠶蛾交尾ノ後卵子ヲ産下シタル后凡ソ軀内ノ卵

子ノ半數前後ヲ産ミタル時盡ク取リ棄テ更ニ新

鮮ノ蠶蛾ヲ取リ之ヲ産卵セシムヘシ

其他製種法ノ要件ハ父長淳ノ考案ニ從ヒ行フヲ以テ最良

ノ法トス

蠶卵紙検査法

蠶卵紙検査法トハ蠶卵紙ノミヲ調査シテ其病毒如何ヲ

鑒定スルノ方法ヲ曰フ從來本邦養蠶者ノ記スル所ヲ觀ル

ニ卵子ノ着色ト光澤トニ依リテ病毒ノ有無ヲ決スヘシ

ト云ヘリ然レトモ未タ卵子ノ如何ナル色ヲ帶ヒタル者ハ

病毒ヲ藏シ如何ナル者ハ之ヲ藏セストノ事ニ至テハ確説

信ス可キ者アルヲ見ス然レモ余ハ色澤ハ卵子内ニ病毒ヲ

藏スルト藏セサルトニ關スルヤ否ヤヲ検査セン爲メ昨年

駒場農學校ニ於テ製シタル蠶卵チ一々丁寧ニ検査シタル

ニ左ノ三類アリ之ヲ八種ニ區別ス(尚ホ其他二三種ノ卵子アレトモ之ヲ略ス)

一類 紫色地ニ第一種紫色ニシテ趨ク青白色ヲ帶ヒ光澤

帶ブ 青色地ニ第二種紫色ニシテ青色ヲ帶ヒ光澤ナキ者

二類 綠色地ニシテ黃色ヲ帶ブ
第三種綠色ニ黃色ヲ帶ヒ尠ク光澤アル者
第四種淡綠色ニシテ淡黃色ヲ帶ヒ尠ク光澤アル者
第五種淡綠色ニシテ灰黃色ヲ帶ヒ光澤ナキ者

三類 紫色ニシテ光澤ヲ帶ブ
第六種紫色ノ地ニシテ光澤アル者
第七種淡紫色ニシテ少ク光澤アル者
第八種淡紫色ニシテ少ク黃色ヲ帶ヒ微ニ光澤アル者

右三類中第一類ノ卵子ハ微粒子ヲ藏スルコト僅々ニシテ
第二類ハ稍、罕アリ第三類ハ他ノ二類ニ比スレハ稍、多シ
トス右ノ如クナレハ第一類ハ最上善良ノ卵子ニシテ第二
類ハ之ニ次キ第三類ハ第二類ニ次ク乃チ第三類ハ卵子中
ノ最下等ナルモノナリ然レハ此法ハ往々齟齬スル事アル
ヲ以テ良トスルニ足ラズ又蠶卵紙ヲ檢査スルニ當テ其紙
面ヲ熟視シ前記ノ規則ニ準シテ善良ノ卵子ヲ選ビ善キヲ
殘シテ惡キヲ取除カハ從テ微粒子ノ病毒ヲ免ル、蓋シ少
キニ非サルヘシ然リト雖顯微鏡ヲ以テ卵子ノ善惡ヲ調査
スル時ハ自然其方法ヲ異ニセスンハ非ス若シ之ヲ調査セ
ント欲スル時ハ一枚ノ蠶卵紙ニ要スヘキ蠶蛾ハ九十頭百
頭若クハ之ヨリ計多ナルヤヲ豫算シ置キ從テ其蛾百頭十
ル時ハ卵紙面ニ墨ニテ縱橫ノ線ヲ引キ之ヲ百區ニ分チ又

九十頭ナレハ之ヲ九十區ニ分チ可成蠶蛾ノ數ト蠶卵紙面
ノ區數トヲ符合セシムルヲ要ス(厚ッ附ケハ之ニ倣フテ區
分スヘシ)蓋シ右區内ニ存スル卵子ハ一蛾ノ産下セルモノ
ト見倣スヘシ而シテ一區内ニハ四百粒内外ノ卵子ヲ存スル
モノトセハ再ヒ之ヲ八小區ニ分チ每小區ヨリ一粒ノ卵子
ヲ取り之ヲ檢シテ每卵微粒子ヲ藏セサレハ上等ト爲シテ
可ナリ又一小區ヨリ取りタル卵子ニノミ微粒子ヲ藏シ他
ノ七小區ニ之ヲ藏セサル時ハ其比例百卵中四分一「ペル
セント」ノ被害卵子アルニ均シ又二小區ニ各一粒ツ
、被害卵アル時ハ其比例四分二「ペルセント」ノ被害卵子
アルニ均シ而シテ百卵中四分一「ペルセント」ノ被害卵子ア
ル者ハ其一區中ハ尙ホ種ト爲シテ可ナリ然シトモ百卵中
四分二「ペルセント」以上ノ被害卵子アル時ハ之ヲ棄テ置
ク可ラス以上陳述スル如ク卵子ノ外面ニテハ其内部ニ微
粒子毒ヲ藏スルノ有無ヲ決定スルコト難ク且ツ蠶卵紙ヲ
區分シ檢點スルノ法モ亦以テ充全トスルニ足ラズ是レ他
ナシ右ノ法ノ如クシテ蠶卵紙ヲ檢査スルハ實ニ卵子内ニ
藏スル病毒ノ多寡ヲ盡ク鑑別スルニアラスシテ只其病毒

ル時ハ卵紙面ニ墨ニテ縦横ノ線ヲ引キ之ヲ百區ニ分チ又

藏スル病毒ノ多寡ヲ盡ク鑑別スルニアラスシテ只其病毒

ノ有無ヲ鑑定スルニ止マルナリ然レ他ニ良法ナケレハ
此法ヲ行フチ後來最良ノ法ヲ求ムルニ外ナラサルナリ蠶
卵紙上ノ卵子ニ就テ病毒ノ有無ヲ鑑定セント欲スル時ハ
其外殻ヲ一粒ツ、開シ后チ之ヲ潰シ一々之ヲ鑑定セズン
ハ能ハザルナリ是レ理論上ノ鑒定法ニシテ實地ニ之ヲ行
フ能ハザルモノナレハ亦良法トスルコ足ラザルナリ

微粒子ヲ殺ス法

微粒子ヲ殺スニ二様アリ一ハ蠶卵蠶兒蠶蛹蠶蛾ニ存スル
チ殺ス法ニシテ一ハ蠶具蠶室内ニ存スルモノヲ殺スノ法
ナリ蠶卵蠶兒等ニ寄生スル微粒子毒ヲ除クニハ盡ク之ヲ
土中ニ埋ムルカ又ハ數月間塩水ノ中ニ浸シ置クヘシ
又蠶具ニ附着シ室内ニ存スルモノハ之ヲ殺スコト甚ク難
シ而シテ蠶具蠶室内ニ存スルモノハ世人多クハ數種ノ藥
ヲ以テ洗滌シ或ハ室内四壁ヲ塗ルニ藥品ヲ以テシ或ハ室
内ヲ薰スルニ藥香ヲ以テスルノ説アレトモ到底皆微粒子
ヲ殺スニ足ラズ故ニ之ヲ殺スヘキ藥品ヲ發見スルハ實ニ
今日ノ急務ナリ因テ案スルニ蠶具ハ養蠶終リテ後可成清
潔ニ之ヲ洗滌シ之ヲ日光ニ燥シ或ハ二三年毎トニ改替フ

ルヲ良シトス又養蠶終リシ後清水ニテ能ク四壁ヲ洗滌ス
ベシ今日ニ方リテハ他ニ良法ナシト信ス 畢

○

支那戰國人民ノ氣質ヲ論ス 赤座 好義

溟々漠々タル支那大社會三千年ノ間ニ於テ一ノ開進發達
ノ時期アリ此時期ハ其前後ニナキモノニシテ東洋社會歷
史ノ一「オーセス」ナリ此時期ハ秦ノ始ヨリ春秋ノ半ニ溯
リ大凡二百餘年間ニシテ之ヲ概シ支那戰國ノ世トナス
此時代ノ性質ヲ論スルニ始ノ如ク支那封建ノ時代ニアラ
ス又後ノ如ク支那帝國ノ時代ニアラス支那同盟共和ノ時
代ニシテ數多ノ獨立國ヨリ成レル時ナリ蓋シ周室ハ獨立
國ノ中央政府ニシテ政令法度ノ源ナリ然レモ其中心ノ弱
小ヨリシテ中央政府ハ地方ヲ制スル能ハス地方ハ却テ中
央政府ヲ制シ一切ノカ處置ヲ仰クニ至ル故ニ條約同盟ノ
權ハ皆ナ一二強大ノ地方ニアツテ餘ノ地方ハ唯數ニ充ル
ノミ其形跡ハ千七百八十七年前ノ米國政体ニ等シク又千
八百四十八年前ノ瑞西共和政治ト甚ク逕庭ナシ
又此時代ニ於テ他ノ時代ト大ニ異ナル性質アリ他ノ時代

於テハ威權ノ力常ニ思想ノ力ヲ制シ此時代ニ於テハ思想ノ力常ニ威權ノ力ヲ制ス蓋シ遊說策略ハ大ニ此時代ニ行ハレ攻守征討ノ目的ハ皆思想ノ力ニ制セラル故ニ或ハ戰ヲ議シ或ハ和ヲ講シ或ハ婚ヲ結フ等唯利ノ一點ニ傾ケリ故ニ其說或ハ化シテ王道トナリ或ハ變シテ霸道トナリ合從トナリ連横トナリ其變化究ナキモノハ是レ即チ思想ノ社會ヲ制セシニ由ルナリ他ノ時代ニ於テハ然ラス威權ノ力常ニ思想ノ力ヲ制ス故ニ治マレハ即チ門地ノ權盛ンニシテ亂レハ則チ兵馬ノ權盛ンナリ理ハ非ニ勝ツト雖モ理ハ權ニ勝ツ能ハス故ニ縱ヒ完全ノ方策アリト雖モ或ハ君主ニ制ラレ或ハ將師ニ壓セラレ遂ニ之ヲ實行スルヲ能ハス唯統領ハ威權ヲ有シ遊客謀臣ハ之カ使役タルヲ免カレス故ニ思想ノ力威權ノ力ニ壓セラレテ其發達ヲ遂クルヲ能ハス

唯ニ政治上ノ思想ノミナラス技藝ニ於テモ亦然リ此戰國ノ時代ニ於テ自己ノ思想能ク他人ノ思想ヲ制ス試ミニ兵ヲ見ヨ唯ニ勇力ヲ角スルニアラス唯ニ古法ヲ襲スルニアラス各自家ノ見ニ由ツテ一種ノ兵法ヲ制シ以テ雌雄ヲ決

スルナリ故ニ孫子ノ如キ吳起ノ如キ又司馬苴穰白起ノ如キ其敵國ヲ攻ムルノ術ハ皆己レノ胸中ニ存セサルハ莫シ又法律ヲ見ヨ唯ニ先王ノ法ヲ墨守スルニアラス各一機軸ヲ出シ以テ之ヲ施スナリ故ニ韓非アリ商鞅アリ子產アリ管仲アリ各其爲ス所ヲ異ニセリ他ノ時代ハ然ラス兵ハ古人ノ式ニ依リ法ハ先王ノ教ヲ守リ聊カ之ヲ變革スルヲ知ラス適々之ヲ變革スル者アレハ輒チ之ヲ目シテ亂人ト爲シ大ニ之ヲ卑ムニ至ル故ニ他人ノ思想己レノ思想ヲ制シ遂ニ己レノ意見ヲシテ實施スル能ハサルニ至レリ然ラハ則チ如何シテ此時代ト他ノ時代ト異ナルヤ如何シテ此時代ニ於テハ常ニ思想ノ力威權ノ力ヲ制シ他ノ時代ニ於テハ威權ノ力思想ノ力ヲ制スルヤ如何シテ此時代ニ於テ才力ノ進步多ク他ノ時代ニ於テハ委靡振ハサルヤ余先ツ之ニ答ヘテ曰ン自由ノ實支那戰國ニ行ハルコト他ノ時代ニ行ハルヨリ多ケレハナリ

余之ヲ自由ノ思想ト謂ハスシテ之ヲ自由ノ實ト謂フ何トナレハ自由ノ思想ハ決シテ支那戰國ニ行ハレス唯自由ノ實行ハルノミ當時帝王ノ思想ハ土地ヲ擴メ國威ヲ貪ルノ

ラス各自家ノ見ニ由ツテ一種ノ兵法ヲ制シ以テ雌雄ヲ決

實行ハルノミ當時帝王ノ思想ハ土地ヲ擴メ國威ヲ貪ルノ

思想ニシテ決シテ自由ヲ欲スルノ思想ニアラス遊士説客ノ思想ハ富貴利達ヲ求ムルノ思想ニシテ決シテ自由ヲ欲スルノ思想ニアラス其人民ハ仁政ヲ欲シ干渉ヲ好ムノ思想ニシテ決シテ自由ヲ好ムノ思想ニアラス縱ヒ自由ヲ主張スル者アルモ却テ之ヲ亂人トナシ以テ惡ミ以テ擯スルニ至ル然ラハ何ラカ自由ノ實ト謂フ余之ヲ三點ヨリ論セントス

第一ニ思想ノ自由トナス此自由大ニ戰國ニ行ハル故ニ楊墨ノ說仁義ノ說ト並行シ老莊黃帝ノ說陰陽雜家ノ說ト並行シ兼愛主義モ行ハレ博愛主義モ行ハレ自愛主義モ行ハレ性善ノ說モ行ハレ性惡ノ說モ行ハレ善惡混ノ說モ行ハレ又王道モ行ハレ霸道モ行ハレ合從モ行ハレ橫連モ行ハレ是之ヲ思想ノ自由トナス
第二ニ門地ノ自由トナス此自由亦大ニ戰國ニ行ハル蓋シ戰國ノ際門地ヲ以テ人ヲ擧ケス才能ヲ以テ人ヲ撰フ故ニ或ハ匹夫ヨリ將相トナリ或ハ貧賤ヨリ公侯ニ進ム或ハ刑人ヲ取り或ハ盜賊ヲ用キ親疎ヲ問ハス新舊ヲ論セス才アレハ仇ト雖モ之ヲ用キ略アレハ姦ト雖モ之ヲ用キ是レ之

チ第二ノ自由トナス

第三ニ仕國ノ自由トナス一國ノ政治ヲ避ケテ他國ノ政治ヲ取ルハ是レ宗教道德ノ自由ト同一原ニシテ一點ノ壓抑ナク人類ノ天ヨリ受ケシ本性ナリ故ニ一國ノ政治思想若シ己レカ思想ト合ハサルキハ則チ去ツテ他國ニ之キ以テ其說ノ售レンコトヲ求ム是レ支那春秋以來ノ形勢ニシテ遊士ノ常ニ好ム所ナリ故ニ齊ニ於テ合ハサレハ楚ニ之キ楚ニ之キテ合ハサレハ則チ秦ニ之ク此等ノ類戰國ニ多シ是レ之ヲ第三ノ自由トナス

此三者ノ自由大ニ支那戰國ニ發達シ人民ノ智識ニ影響ヲ與ヘシナリ此自由一ハ人民ニ競争力ヲ與ヘ以テ其智識ヲ發達センコトヲ欲シ一ハ君王ニ競争力ヲ與ヘ以テ賢才ヲ得ンコトヲ欲セリ然ラハ則チ此自由ノ外戰國ニ特別ナル者ナキ歟右ノ外戰國ト他ノ世ト別ツ者ナキカ是全ク戰國ノ發達セシ理由ナルカ
試ミニ他ノ時代ヲ見ヨ晉魏ノ際國ノ分裂スル者數十其力ヲ角スルコト數紀貴賤ノ別嚴ナルニアラス異教ノ禁行ハルニアラス庶士ハ一國ヨリ一國ニ移リ策略ハ一議ヨリ一議

變ス三者ノ自由蓋シ乏シキト爲サス而レモ未タ民智ノ開
 發セシヲ聞カス又我國應仁以還ノ形狀ヲ見ヨ足利ノ末天
 下麻亂豪傑割據唯ニ君ハ臣ヲ擇フノミナラス臣モ又君ヲ
 擇フ謀議ハ下士ト將校トヲ擇ハス軍師ハ匹夫ト貴種トヲ
 別タス自由ノ實大ニ行ハル者ノ如シ然レモ民智開發ノ度
 遙ニ支那戰國ニ及ハサル者ハ抑モ何ソヤ余反覆丁寧シ
 テ之ヲ考フ而シテ後他ノ原因アツテ然ルヲ知ル他ノ時
 代ニ於テハ邦國ノ分裂常ニ戰爭ノ時ニ生シ此時代ニ於テ
 ハ邦國ノ分裂常ニ治世ノ時ニ生ス故ニ他ノ戰國ハ勇力ノ
 自由ニ過キスシテ此戰國ハ智識ノ自由ナリ故ニ他ノ戰國
 ハ多ハ武人ヲ出シ此戰國ハ多ク才子ヲ出セリ是レ思想ノ
 力能ク兵馬ノ力ヲ制スル所以ナリ然ラハ則チ此戰國ヲ發
 達スル者ハ徒ニ自由ノ原素ノミニアラズ又平和ノ原素ア
 ルニ由ル夫ノ亂世ニ於テ自由ノ原素アツテ平和ノ原素ニ
 乏キト治世ニ於テ平和ノ原素アツテ自由ノ原素ニ乏キト
 均シク是レ以テ智識ヲ發達スルニ足ラス唯此戰國ハ此兩
 原素アリ一ハ能ク智識ヲ增長シ一ハ能ク智識ヲ擴張シ遂
 ニ思想ノ力ヲシテ能ク威權ノ力ニ克クシムルニ至レリ

今眼ヲ轉シテ歐州ノ文明ヲ見ヨ往古羅馬帝國ノ滅亡セシ
 ヤ許多ノ獨立國ヲ成セリ此獨立國ハ悉ク羅馬ノ文明ヲ嫌
 ヒ自由ノ政体ヲ以テ其人民ヲ支配セリ然ルニ此各國互ニ
 干戈ヲ動シ寧息セサルヲ數百年千三四百年ノ頃ヨリ人民
 漸ク干戈ヲ嫌ヒ平和ヲ欲スルニ至レリ是ニ於テ平文藝勃
 興シ學術大ニ開ケ遂ニ今日ノ景況ニ達セリ故ニ歐州ニ於
 テハ自由ノ原素平和ノ原素ニ先チ支那戰國ニ於テハ平和
 ノ原素自由ノ原素ニ先ツ其前後本末ノ序相異ナルト雖モ
 其智識ヲ發達シ心思ヲ養成セシ點ニ至ツテハ殆ント一轍
 ニ出ツルカ如シ
 然ルニ歐州ニ於テ平和ノ原素出テシヨリ自由ノ原素常ニ
 之ニ伴ナヒ平和ヲ以テ智識ヲ研キ自由ヲ以テ之ヲ擴メ以
 テ事物ヲ探究シ以テ心志ヲ琢磨シ以テ器械ヲ製作シ以テ
 國利ヲ興行ス支那ハ大ニ之ニ反シ此原素一タヒ戰國ニ
 會セシヨリ後常ニ齟齬シテ合ハス平和ノ時ニ自由ナク
 自由ノ時ニ平和ナク故ニ思想ハ深ト雖トモ滯滯シ志氣
 ハ切ト雖トモ褊窄シ嗚呼是レ東西文明ノ異ナル所以ノ
 一歟

雜報

○スウェーデン皇帝の懸賞問題 スウェーデンのオスカ

ル皇帝は先にも數學上の問題と掲げ貴重なる賞牌及賞金と懸け玉ひしか此度又東洋の學問に係る左の二件を付て最上の論文を賞を與へんと布告し玉へり一は「セミチック」諸國語の歴史、一はマホメットの時代前アラビヤ開化の記載なり賞は金牌(値二百五十圓)と金三百圓余なり論文は「ラテン」語或は獨乙語を以て記し千八百八十八年(明治廿一年)六月三十日前よりライプツヒの教授フライシエル或はストラスブルヒの教授ノルデッケの内へ送る可しと

○ベルジウム皇帝の懸賞問題 レオポルド第二世は毎年五千圓の賞金を人間の安樂上に關係有る事件(前以て所定の)に付て最上の論文に與ふると定め玉へり競争は隔年よりベルジウム國人に限り或は廣く萬國の人を許すものあり本年の問題は「海岸の砂地を改良する方法」を以て佛國の工學士ド、メー氏賞を得たり次回萬國人競

争の問題は「動力及照光を應用したる電氣學の進歩、其應用及經濟上の利益何如」なり論文は佛語を以て記し千八百八十九年(明治廿二年)一月一日前農商務大臣(ベルジウム)のへ送る可しと

○帝國大學記要 帝國大學に於て題號の如き名を以て歐文雜誌と出版し分科大學に於て各自適宜に其分科に屬するものを編纂すると成りたり是れ重に帝國大學に於て教員學生等の研究したる事項を登録し歐米の學校、學會、學術雜誌等に送り一は本邦學事の進歩を外國人に知らしめ一は其批評を乞ひ以て益學事を盛ならしめんとするの在りと理科大學に於ては己に二冊を編纂するに足るの材料有り來る九月頃までに出版に成る由なり此舉の如きは記者の大に賛成する所なり他日其出版を待て或は之が評なすと有る可し

○小遊星 ヴァーノン「ドクトル」パリサは本年四月五日尙ほ一個の小遊星を發見したり第十三等の大さなりと云ふ小遊星の總數は之まで二百五十七となれり(サイエンス)

○日蝕皆既 來年八月十九日日食皆既有り皆既の見ゆる線ハ本邦(越後地方)を經過する由星學者ハ定めし觀察の爲め出張するとならん記者と追て専門家と乞て詳細の記と登載す可し

○アルバン、クラーク 米國ボストンの有名なる鏡師アンバ、クラーク氏ハ鏡を磨く術ハ妙を得て是まで人の磨く能はざる大鏡と磨りたり米國ワシントン並に露國ブルコハの大望遠鏡の物体「レンズ」の如き氏有りて出來たるものにして他人の企て及ばざる所なり露國皇帝は深く氏の此望遠鏡と磨きたる功と嘉し特に金牌(經三寸餘厚さ二分弱)を造り氏に贈り玉へりと双方の美談なりと云て可なり

○第五十九回理醫學士會 獨逸の同會ハ來る九月十八日より二十四日迄の一週間と以て伯林府に開くと決し今回は從來行ひし事業の外に醫學上新發明器械の博覽會を開く見込にて既よ之と世に廣告せり其主旨は醫學研究に關する器械の最近進歩と示すに在りて更に商賣上の性質と有せざる者なり會場は伯林大學校なりと云ふ

○磁氣を執らざる鋼鉄 通常の鋼鉄にマンガン一割半と交せて製せる鋼鉄は幾と全く磁氣と感ずるとなし通常鋼鉄の磁氣と執る最大の大さと右の鋼鉄との此例は四百乃至八百と一との關係なりと或る米國新聞に見へたり如何の者にや

○鉄子チ錆付らざる法 グラヒットの細粉を油よてとろとろに解きチヂに付けて用ふれば數年と經るとも錆付くとなし

○葡萄の黴と防ぐ法 近年佛國の葡萄園ハ一種の黴を生し之か爲め葡萄を害すると少なからざるを以て昨年の七月ア、ムンツ及び其他の諸氏は試に硫酸銅の溶液を葡萄の樹に注きたるに頗る好結果と得たりと云ふ其法ハ先づ硫酸銅の十ペルセント乃至二十ペルセントの溶液(即ち百分の溶液中に十分乃至二十分の硫酸銅と含むもの)を製し小き水銃と以て此溶液を葡萄の樹に注くあり然るときと黴の爲めに實又は葉の落るとなく其實をして充分よ成熟せしむると得るの故よ葡萄の目方は勿論之に含む砂糖の量も右の法と行はぬものに比すれば遙か増加

し酸味も亦隨て減少せり然れども此葡萄と以て製造した

に二週問程もたてば其根能く土と支へ三四ヶ月の後ハ土

と有せざる者なり會場は伯林大學校なりと云ふ

砂糖の量も右の法と行はぬものに比すれば遙か増加

し酸味も亦隨て減少せり然れども此葡萄と以て製造したる葡萄酒中よりは毫も銅質を含まざるを唯々枝葉又は葡萄乃絞り滓等に甚た僅少の銅分と存するのみなり若し又硫酸銅又石灰を混合して用ゆる時の尙は一層其結果を得べしと本年三月の英國工業雜誌に見へたり

○地學會誌の乙部即ち外國語と以て記したる會誌の第一輯第一卷は先頃發兌になりたるを記せしり近頃又甲部即ち邦語と以て記したる部の第一輯第三卷の上梓したり其内に載する所の論説は富士大井兩河間地質概則記横山又次郎。阿仁鑛山地質概略中島謙造。第三紀化石鑑定報告(第一回)横山又次郎。本邦地學沿革史(第二)中島謙造なり

○堤防の土止 堤防等の土の流るゝと止めるよは是迄一般に草の類を播き其根と便りとせしと皆人の知る所なり然るも是は急の間に合はず兎角うのはびこつて土の固まる迄には屢々土と置直さねむならぬとありて不都合少なからざりしか近頃佛人カンビエ氏は八重罌粟の最も此用と供して効能あるを發見せり此植物は生長早くして僅

に二週間程もたてば其根能く土と支へ三四ヶ月の後は土と固めると他の植物の及ぶ所にあらずと此は年枯のものなれども一たびまけば毎年自然にはへて別にまきなほとに及ぶすと云ふ

○暴風の長旅 ヘンリー、ハリス氏と去年十一月開會の英國氣象學會に於て暴風の長旅を就き一場の講演を爲せり其畧は曰く同年九月廿七日フックリッピン島の近傍より起りし暴風は日本及びアリウシヤン多島海と經過し十月十日遂に合衆國に入り夫よりロッキン山脈と横切り其北部諸州及びカナダを経てラブラドル及びダビス海峡まで進行し其大西洋より出るや又大西洋の熱帶地方より來りたる暴風と合せりこの處にて同月十九日より廿五日までは進行を止め居りしが此間に又もや一強風起りて廿四日の朝英國南部の地方と吹拂ひたり此時の一時期停止し居りし暴風は忽ち件の通路と追蹤し廿七日を以て佛國海岸に達せしが其來るや歐羅巴西部并びに中部及びアルゼリヤに於て急激なる強風及び非常の漲水と起せり既して暴風佛國及び和蘭を經過したる後は漸く其勢力を失ひ遂に

十一月一日ボルチック海上にて全く静まれり抑、此暴風が吹初めしより茲に至るまで卅六日を費し且つ其經過したる所の行程凡ろ一萬六千餘里ありと云ふ

○動植物寒冷に耐ゆると コルマン、マッケンドリックの二氏の凍凝器を以て零點を降ると八十度以下の寒を生じ種々の腐敗すべき物質を之に暴し置き色々時間と換へて試験したる後腐敗を起すべき温度に至らしめ其結果と觀察せり二氏の試験せしものは生及び罐詰の肉、葡萄酒、牛乳、麥酒、肉汁、中性としたる植物の浸液、腐敗せんとする諸液、葡萄糖と生肉の濃き浸液等にして零點以下八十度乃至百二十度の寒に暴すと五六時間乃至百時間なりしが結果は孰れも同様なりしとぞ總て此等の場合にては腐敗は一時寒の爲に妨げられ或は遅緩となりたれども決して極微有機物の全く撲滅されたるに非ざる故多少の間と過て腐敗の起るべき好都合の温度に至れば再發せり二氏の説いのかゝる寒さは能く生活せる成熟の有機物を殺すも其核子を併せて殺すと得ずと又冷血動物なる蛙と執りて零點以下二十度乃至三十度の温度に暴すと半時間

なれば凍結すれども之を温めて蘇生せしむるを得たり然れども零點以下百度の温度に暴すと二十分時間なりしときは遂に蘇生せざりしとぞ又温血動物なる兎と零點以下百度に暴すと一時間なりしが更に氷結すること無かりし但体温九十九度より四十三度まで降下せりと

○日本地震學會報告第三冊 此頃同會より出版せり其登録する所フヨンミルン氏の地皮微動之説と題する論文は最初人にて生ずる地皮の微震と論し次は天然の微震と説き地球上何地に行くも地は晝夜斷へず震動して止まず而て此現象は地震よりも一定の規律に依て増減し且つ地震の前は發するとあり然れとも之を以て地震と前知し得べき乎奈何に至ては目下理學中の一大問題あるべきと述ぶ關谷清景氏の明治十七年十五日地震の記と題する論說の中は詳細に地動の性質を説明されたれば造家學師土木學師の爲めには有益の文章なるべし又和田雄次氏の氣浪及海浪の説は彼の有名なる明治十六年八月廿六日瓜哇國ジャバクラカトワ火山爆發の景況災害の多寡より當時該噴火の爲めに空氣微動して地理局の晴雨儀を感し又

之か爲めに海嘯と起し遠く我伊勢桑名に備へある量水儀

ロデリック、ディユ、ディッキンソン氏

執りて零點以下二十度乃至三十度の温度に暴すと半時間

時該燄火の爲めに空氣微動して地理局の晴雨儀に感じ又

之か爲めに海嘯と起し遠く我伊勢桑名に備へある量水儀
に感せしとを述へたり右等の數に基き同氏は氣浪及海浪
の速度を算定し更ニ大洋の深さを推算せり此結果の有益
なるは言と待たず聞くクラカトワ火山爆發の件并に之と
併發せし現象に就ては各國學士の間に尙議論一定せずと
和田氏の論文の如きは海外の學會に報知あつて然るへま
と信するなり

○英語會 同會は去る十五日小石川久堅町なる帝國大學
植物園に於て其特別集會を開きたり今當日の模様を聞く
に會員及其同伴人并に招待に應じて來會したる紳士貴婦
人合せて九十名餘午後七時一同食卓に列し食事了りて午
后九時頃より當日の演藝と始めたり其番組は

- 第一、シエキスピア著ジュリアス、シーザの内一幕
アントニー 和田垣謙三氏
ブルータス 菊池大麓氏
- 第二、リーディング(本讀)
飯島 魁 氏
- 第三、スコット著レーデ、オブ、ゼ、レ、キの内一幕
フヒツ、ゼームス 櫻井錠二氏

第四、シヤレード(三幕)

ロデリック、ディユ デイツキソン氏
デ、コックス氏
井上十吉氏
イコックス氏
宮岡恒次郎氏

にて各藝曲の間には音樂を奏して餘興と添へたり當日の
藝曲は何れも至極上出來あて就中和田垣菊池兩氏の「ユッ
リアス、シーザ」の僅前日其用意に取り掛りたる由なるが
一の欠點なく兩氏の演説とも板戸に水を流すが如く來會
人として兩氏の藝能に感服せしめたる由又ディツキソン
櫻井兩氏の掛合は兼て其の爲、裝飾とも用意なし且つ役
割も至極適したる事故餘程面白く語勢と云ひ身振りと云
ひ萬事上出來たりしと飯島氏の滑稽本讀は氏の最も得意
とする所なれば終始參觀人をして愉快ならしめ餘程興を
添へ又コックス氏等の催し係わる「シヤレード」も至極面
白かりしと云ふ當日來會人の殆んど半數は貴婦人にて何
れも英語に通し又其過半の洋服と着せられたれば一層賑

やかしく近來珍らしき催しなりしと

批評

英國ロンドンノロングマンズ、グリーンン商會有名ナル書肆ニシテ其出版スル所ノ書籍善良ノモノ甚タ多シ今般其代理人本邦へ渡航シ學術ニ關スル書籍數卷ヲ本社ニ持テ來リ其批評ヲ乞フ本社ニ於テ之ヲ各其専門家ニ依頼シタリ依テ今回先ツ左ニ其二三ヲ掲ク餘ハ退々登載ス可シ讀者モ之ニ由リテ其等ノ書ノ善惡ヲ知ルヲ得ハ大ニ益スル所有ル可シト信ス

記者識

Practical Physics by Glazebrook and Shaw
グレイズブルック氏
シヤウ氏
合著物理學實驗法

トクトル、ノツト批評

此書ハ其名ニ負ヘル物理學實驗ヲ修メントスル學生輩ニハ丁度手並ノ一佳書ニツアル、其含蓄スル事柄上ヨリ見レバ在來ノコーラウシヨ杯ノ書ト多少相類スル所アレ共其解説ノ方法ニ至リテハ全ク異様ノモノナリ。思フニ此

書ハ始終一定ノ程度ヲ守リ而テ現今日進ノ理學思想ト並走スルヲ勤メタルモノナリ。加ルニ全篇理論應用ノ調和宜ヲ得テ學者若シ之ヲ活讀セバ其益ヲ得ル蓋シ際限アル可カラズ。本書中越歷通論ノ概説ノ如キ、マキスエル氏ノ光色ノ理論ノ如キ、磁力學、電氣學ニポテンシャルノ思想ヲ透導シタル如キ。其際隱然トシテマキエル氏ノ精紙表ニ往來スルモノニ似タリ。著者蓋シ彼ノカバンデッシユラボラトリ一巨臂ガ氣風ニ薰スル所ナクンバアラス抑モ此篇ハ尋常平凡ノ集修ニ由テ成レルモノニ非ス。多年授業ノ經驗ニ由テ生育シタルモノナリ。其用語モ至テ明折ニシテカセトメートル、セキスタント、スペクトル計等ノスヘ付ク仕用ノ指圖丁寧反復、特ニ反光鏡電流計ミロレガルバンメートル用法ノ如キ他書ニ嘗テ見ザル所ナリ、初學ノ爲ニハ是等ハ委シキ上ニモ委カランコソ望マシケレ。扱又機械ノ感シノ善シ惡シノ論ハ取引キ勘定然トシテ能ク讀者ヲシテ其本旨ノ有ル所ヲ曉リ易カラシメタルハ余カ切ニ嘆賞スル所ナリ
此書固リ學生ノ用ニ供スル爲ナレバ理論ノ緼奧ニ涉レル

所ナキモ亦思考アル學生ヲ實測ノ何タルヲ曉ラシムル

London Science Class Books.

其解説ノ方法ニ至リテハ全ク異様ノモノナリ。思フニ此

此書固リ學生ノ用ニ供スル爲ナレバ理論ノ編奥ニ涉レル

所ナキモ亦思考アル學生ヲ實測ノ何タルヲ曉ラシムル

ニ充分ナル解説ヲ與ヘリ、蓋然誤差ノ事モ亦適宜ノ程度

ニ論セリ特ニ日本ノ概子ノ學生ノ如ク幾分カ初等算術ニ

完然ナル教育ヲ受ケタル人ニハフィジカルアリスメチツ

ク(實物的算術)ト云フ條チ一讀センコトヲ勸告ス。一休實

驗上ニテ四桁己上ノ實數ヲ確定スルニハ余程特種ノ手段

ヲ要スルモノニシテ通常ハ其下ニ往來スルモノナルチ此

ル場合ニ於テモ尙六桁モ七桁モ運算チ及ホスノ極メテ

不用ニシ且ツ迂濶ノ手段ナルヲ明示セリ、次ニ掛ケ算割

算ノ便法ヲ説キ其例ヲ示セリ是等ハ算者ノ時ヤ紙ヤ筆ヤ

氣魂ヲ費ヤスコト最モ少クシテ丁度充分ナル結果ヲ得ル

ヲ目的トセリ。然レ共又其捷徑ニ失センコトヲ戒メテ結末

ノ成績ト測定ス可キ實數トハ必シモ常ニ比例スルモノニ

非シテ其相互ノ關係ニ因テ大ニ取捨ス可キヲ痛論セリ、

凡ソ多數ノ學生ニ授業スル教員ノ坐右又實驗室ト名ノ付

ク實驗室ニハ必ス數部ヲ備テ常ニ學生ノ參考ニ備ヘハ其

效ヲ見ル蓋シ期ス可キナリ

○

London Science Class Books.

1. Vertebrata by Professor A. Macalister.

2. Invertebrata.

現今ノ動物學ノ有様ニテハ簡單ナル教科書ヲ著スハ實ニ

難キコトニシテ先年出版ニナリシ Science Primer ノ内ニモ

動物學丈ハ見ヘザリキ上ニ名ヲ擧タルマガリストル氏著

ノ小動物書ハ此點ヨリ考フレハ余程好ク出來タルモノニ

シテ僅ニ百三四十ページノ二小冊ノ内ニ動物界ノ大畧ヲ

記シ解剖、慣習等ニ就キ重ナル事實ハ大抵擧タルモノ、

如シ又此程度ノ書ニアリテハ概子下等無脊動物ノ部ハ畧

ニ過キ或ハ過誤多クシテ到底用ユ可ラスト雖モ此書ハ中

々委ク記シタルモノ、如シ凡ソ此位ノ大サノ書ニテハ此

書ノ右ニ出ルモノハアラザルベシ我國ノ中學校ナドニハ

隨分適當シタルモノト信ス 箕作 佳吉

○

明治十八年地震報告

此項内務省地理局ヨリ明治十八年地震報告(東京大學助

教授兼内務省御用掛關谷清景監修、地理局員大塚信豊、朝

倉慶吉、前田直吉編修)ヲ出版セラレ其一本ヲ弊社ヘモ下賜セラレタリ之ヲ閱スルニ印刷總テ鮮明ニシテ又明治十八年一ケ年間地震ノ多寡ヲ示ス圖、同年中月割圖、地震ノ例圖等各彩色ヲ施シタルモノヲ載ス之ヲ通讀スルニ概畧左ノ如シ

地震ノ多寡 明治十八年一月ヨリ十二月ニ至ル一年間全國地震ノ總數ハ合計四百八十二回ニシテ平均スレハ一月間四十回、一日間一回、三ノ割合ナリ其最多キハ關八州及陸奥、根室ノ諸國ニシテ東京ハ特ニ六十八回ノ多キニ達ス次ハ甲斐、磐城、陸前、及ヒ釧路ニメ其次ハ美濃、尾張、伊勢、紀伊、阿波ノ諸國トス其他ハ概子五六回以下ニ過キス而シテ沿海ノ島嶼并ニ南海ニ在テ讚岐、土佐ノ一兩部、九州ニ在テ豊前、肥前ノ一兩部及ヒ北海ニ沿ヘル諸國ハ全ク報告セサルモノアリ蓋シ此等ハ全ク地震ナキノ地方ナラン乎但シ其他ノ諸州ニ於テ全ク地震ナキノ地方少ナキヲ見レハ一ノ疑題トナサ、ルヲ得ス尙ホ將來ノ研究ヲ俟テ之ヲ確定セントス然レモ北海ニ沿ヘル諸州ニ於テハ會マ地震ヲ報告セシモノアルモ其數極メテ稀少ナル

ヲ見レハ蓋シ東山、北陸、山陰、山陽ノ間ヲ畫斷スル一帯ノ山脈ハ地震頻繁ナル地方ト稀少ナル地方トヲ界分スルモノ、如シ特リ北海道ニ至テハ其地、地震多シト稱スレモ其報告ヲ得ルニ極メテ寡ナシ是必人口稀疎郵便不便等ノ爲メナラン

地震ノ季節 地震ノ季節一ナラス今各月ノ震數ヲ掲レハ左ノ如シ

震數	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	合計
三	四	四	七	七	五	一	四	三	三	二	九	四	五
四	四	七	七	五	一	四	三	三	二	九	四	五	四一
五	七	七	五	一	四	三	三	二	九	四	五	五	五一
六	七	七	五	一	四	三	三	二	九	四	五	五	四〇
七	七	七	五	一	四	三	三	二	九	四	五	五	四八
八	七	七	五	一	四	三	三	二	九	四	五	五	四二
九	七	七	五	一	四	三	三	二	九	四	五	五	四〇
十	七	七	五	一	四	三	三	二	九	四	五	五	四八
十一	七	七	五	一	四	三	三	二	九	四	五	五	四二
十二	七	七	五	一	四	三	三	二	九	四	五	五	四〇
十三	七	七	五	一	四	三	三	二	九	四	五	五	四八
十四	七	七	五	一	四	三	三	二	九	四	五	五	四〇
十五	七	七	五	一	四	三	三	二	九	四	五	五	四八
十六	七	七	五	一	四	三	三	二	九	四	五	五	四〇
十七	七	七	五	一	四	三	三	二	九	四	五	五	四八
十八	七	七	五	一	四	三	三	二	九	四	五	五	四〇
十九	七	七	五	一	四	三	三	二	九	四	五	五	四八
二十	七	七	五	一	四	三	三	二	九	四	五	五	四〇
二十一	七	七	五	一	四	三	三	二	九	四	五	五	四八
二十二	七	七	五	一	四	三	三	二	九	四	五	五	四〇
二十三	七	七	五	一	四	三	三	二	九	四	五	五	四八
二十四	七	七	五	一	四	三	三	二	九	四	五	五	四〇
二十五	七	七	五	一	四	三	三	二	九	四	五	五	四八
二十六	七	七	五	一	四	三	三	二	九	四	五	五	四〇
二十七	七	七	五	一	四	三	三	二	九	四	五	五	四八
二十八	七	七	五	一	四	三	三	二	九	四	五	五	四〇
二十九	七	七	五	一	四	三	三	二	九	四	五	五	四八
三十	七	七	五	一	四	三	三	二	九	四	五	五	四〇
合計	四	四	七	七	五	一	四	三	三	二	九	四	五
平均	四	四	七	七	五	一	四	三	三	二	九	四	五

更ニ之ヲ四季ニ區分スレハ左ノ如シ

季	震數	合計	平均
春 三四月	一二五	四八二	一三〇、五
夏 五六月	一〇四	四八二	一三〇、五
秋 七九月	一三七	四八二	一三〇、五
冬 十十二月	一一六	四八二	一三〇、五
合計	四八二	四八二	一三〇、五

更ニ寒暑ノ二候ニ區分スレハ左ノ如シ

候	震數	合計	平均
暑 四月ヨリ九月マテ	一二三七	四八二	一三〇、五
寒 十月ヨリ三月マテ	二四五	四八二	一三〇、五
合計	四八二	四八二	一三〇、五
平均	一三〇、五	一三〇、五	一三〇、五

地震面積 地震面積ノ小ナル者ハ一郡一區ニ止ルト雖

モ大ナル者ハ數千方里ニ渉ル現ニ十月三十日ノ地震ノ如

八百三十五方里ニ渉レリ今各月地震ノ總面積及其平均チ

モ大ナル者ハ數千方里ニ渉ル現ニ十月三十日ノ地震ノ如キ陸羽ヨリ起リ東北根室、釧路ノ地方ニ達シ西南下總、武藏ニ至リ其震動ヲ感セシモノ十六ヶ國ニ其面積五千

八百三十五方里ニ渉レリ今各月地震ノ總面積及其平均ヲ掲レハ左ノ如シ

月	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	合計	平均
總面積	一〇〇一八方里	一六、九七八方里	七、三二七方里	四、七四八方里	一〇、三八五方里	一五、八八八方里	九、一六九方里	六、〇六四方里	一四、五六九方里	二一、三四四方里	四、二二〇方里	一一、七〇三方里	一一三、三〇三方里	一一〇、二五方里
平均面積	三三三	三八六	一九八	一二八	二〇四	三六九	二八七	二〇九	三三四	五三一	八一	二九三	三、三三三	二七六

以上一年間ノ總計ハ十三萬二千三百〇三方里ニシテ之ヲ平均スレハ一月一萬千〇二十五方里ニシテ一回二百七十六方里ナリ而シテ地震ノ其平均即二百七十六方里ヲ超過シタル者ハ九十六回ナリ

震ナリ而シテ三十回中ノ二回ハ皆五千方里以上ナリ

但本文ニ掲ケタル一年間ニ於テ地震ヲ感シタル地方ノ總面積十三萬二千三百〇三方里ヲ以テ全國ノ面積二萬四千六百三十七方里(琉球ヲ除ク)ト比較スレハ全國ニ於テ一年間ニ地震セシ面積ハ全國ノ面積ヨリ廣キヲ五倍、四ノ割合ナリ

地震ノ區域 地震ノ區域ハ一ナラス然レモ概テ一定セラル者ノ如シ何トナレハ地震ノ最多キハ常陸、下總、下野、武藏ニアリテ其震數四十二回ニ達シ其區域概テ同一ニシテ其面積モ亦粗同一ナリ又陸奥ノ北端下北郡ニ於テモ其地方ニ限リ屢地震アリ一年間二十四回ニ上リ紀伊近傍ニ於テモ一年間ノ震數七回ニ及ヘリ

面積ノ大少ニ依テ區別スレハ三百〇九回ハ百方里以下ノ狹震、百四十三回ハ百方里以上、三十回ハ千方里以上ノ廣

地震ノ強弱 強震ヲ感シタルハ東北ニ於テハ關八州及根室、北海道、東山ニ於テハ美濃西國ニ於テハ薩摩ナリ就中美濃ハ武儀郡ニ在テ一日中六回ノ地震アリ而シテ其四回ハ皆強震ナリキ

テハ會マ地震ヲ報告セシモノアルモ其數極メテ稀少ナル
地震面積 地震面積ノ小ナル者ハ一郡一區ニ止ルト雖

震原 地震ノ淵源一ナラス常陸、下總、下野、武藏ノ震原ハ常陸霞ヶ浦或ハ鹿島洋ニ在ル者ノ如ク紀伊近傍ノ震原ハ紀州洋ニ在ル者ノ如シ以上大率海岸ヲ離レテ海底ニ在ル者多シ然レハ間、海岸ニ感セスシテ陸地ノミニ感スル者アリ即震原ハ海底ノミニ限レル者ニアザルナリ但シ震原ハ其區域甚廣濶ナリト認ムヘキモノアリト雖モ本篇記載スル所ハ只其最モ著シキ部分ニ就テ之ヲ言フノミ

火山ト地震ノ關係 全國中最モ地震多キハ武藏、下總、常陸及ヒ下野ノ平原ニシテ其地域兩野ヨリ駿河、伊豆及ヒ大島ニ連亘スル一帯ノ火山脈ニ環圍セラル之ニ亞クモノハ磐城岩代ヨリ北陸奥ニ至ル諸國ニシテ其山脈中火山處々ニ散在セリ而シテ下北郡恐山近傍ノ如キハ此地ニ限リテ特ニ屢地震アルヲナ報道セリ是ニ由テ之ヲ見レハ火山近傍ノ土地固ヨリ地震多シトス然レハ日本海ニ沿ヘル加賀、伯耆、石見等ノ諸國ハ往々火山アリ九州ハ火山殊ニ多シト雖モ地震皆極テ僅少ナリ是ニ由テ之ヲ觀レハ火山近傍ノ土地亦地震少キモノアリ彼是計較スルニ地震ノ多少ハ必シモ火山ノ多少ニ關係セサルナリ

以上述フルカ如ク地震ハ多ク其源チ海中或ハ海濱ニ發シ必シモ火山ノ爲メニ起ラサルニ似タリ然リト雖モ信濃ハ火山四境ニ群峙シテ地震多ク間、起原トナルヲアリ是レ火山若クハ該地地層ノ變化ニ因スル者トナスモ或ハ不可ナキカ如シ
此他毎月地震記事及毎地震例記事等アリ讀者詳細ヲ知ラント欲セハ該報告ニ就テ見ラルヘシ

雜 錄

補文館記

內田 周平

昔在斯把爾他國。有利克爾克者。憂其風俗之懦弱淫佚。乃創定新法。凡人生七歲。必使入學校。以育體與智。而最重體育。練習極嚴。是以人民皆筋骨健而心膽勇。入則衛邦。出則捍敵。其國威終震於四隣矣。若利克爾克者。可弗謂愛國之士乎哉。竊惟自聖天子御極。十有九年于茲矣。百度修明。人々相安於無事。而勢之所馴致。文弱之弊亦漸見焉。姑就學生言之。厖羸薄弱。不勝進取者有之。媵媵脂韋。不能特立者有之。冶容美言。便儂自喜者有之。佻達遊蕩。酒色是耽者有之。

之。凡此數者。豈非由其精力不足。而馳外忘本歟。夫人々相

志堅以研學藝。長才識。蓄道德。翼贊國家文明之治。而輝赫

之。凡此數者。豈非由其精力不足。而馳外忘本歟。夫人々相聚。以建立邦國。其精力之所積。即一國之氣運也。一國氣運之盛衰。則實基乎人々精力之旺否。人々精力之旺否。足以爲一國氣運之盛衰。則養精力之法。其可忽乎。近者官屢諭府縣學校。置體育之科。可謂得其要矣。則任其責者。當奮然擔當。以有所振勵也。而尙有因循苟且。不敢體上旨者。吁何其情不切乎愛國也。吾大學諸子。蚤有見於此。明治十六年。相謀欲創一種練體場。以爲我邦習練筋骸之方。莫若柔術。乃相地于本鄉壹岐阪。新構一堂。起工於某月。告成於某月。澗若干。周若干。柱礎極牢。屋舍極樸。無有彫鏤之美。丹碧之觀。而及其成之日也。諸子欣然相慶。於是延名手井上氏爲師。以講學餘暇。皆陸續來習。至今三年。氣力日益壯。精神因此以大奮焉。蓋所謂柔術者。運用體力。以決輸贏。漢人所謂拳法之類。而其館名曰補文者。實欲補文弱之弊焉耳。抑吾又聞之。誠於中則形於外。故察乎外。可以識乎中。試觀於吾黨之士。有尪羸薄弱。不勝進取者乎。無有也。有媵嫻脂韋。不能特立者乎。無有也。有治容美言。便儂自喜者乎。無有也。有佻達遊蕩。酒色是耽者乎。無有也。然則遊斯館者。其體強而

志堅以研學藝。長才識。蓄道德。翼贊國家文明之治。而輝赫皇威於外邦者。可知矣。豈啻古斯把爾他人民之比云乎哉。此則吾黨愛國之志也夫。明治十九年一月廿九日。大學文學生內田某撰。

中村敬字曰。文與題相副。氣力實於中。光彩發乎外。感々

服々

又曰。補文館之稱甚當。

社告

○弊社雜誌ノ儀ニ付愛顧諸賢ヨリ本社ヘ宛テ御投寄下サレ候御書信中或筆意ノ高雅ナル筆勢ノ快奔ナルニ過キ御宿所御姓名ヲ辨シ兼テ候事モ之アリ之ガ爲メ雜誌郵送等ニ差支チ生シ殆ンド困却仕候仍テ以後ハ御面倒恐入候得共何卒御宿所御姓名等ハ成ベシ明瞭ニ御記シ奉伏冀候

○幣社雜誌御購讀諸賢ヨリ雜誌代價ヲ郵便小爲替ニテ御送付ニ相成其證書面ノ拂渡郵便局名及請取人氏名ノ部分ヲ空紙ニテ御送付ニ相成候方間々有之右ニテハ如何様ノ間違相生シ候哉モ難斗候ニ付將來ハ該證書面ノ拂渡郵便局名ノ左側ニ東京内神田請取人氏名ノ下段ニハ東京神田裏神保町壹番地東洋學藝社ト必ス御記入之上御送付被成下度若御記入無之ニ由リ如何ナル間違相生シ候トモ本社ニ於テハ其責ニ任セス候此段廣告仕候

社告

東洋學藝雜誌 自第壹號 至第拾號 合本壹册

右第三版賣價金七拾五錢

東洋學藝雜誌 自第拾壹號 至第貳拾號 合本壹册

右第二版賣價金八拾五錢

東洋學藝雜誌第五十五號 明治十九年四月 廿五日發兌

目錄

○理化兩學ノ功益ヲ民間ニ播布センヲヲ 務ムベシ 渡邊 洪基

○地文學講義第二回(水圈) 小藤 文次郎

○虫取草實檢記 理科大學教授

○人種改良ノ辨(前號ノ續キ) 白井 光太郎

○微粒子病之說 駒場農學校助教理學士 加藤 弘之

○雜報數件 佐々木 忠次郎

○雜錄○米歐瑣談 理科大學教授 菊地 大麓

○學會記事 菊地 大麓

目錄

○人體ニ住ム蟲ノ話 飯島 魁

○支那史體ヲ難ス 末松 青萍

○地文學講義第二回(海流及潮汐) 理科大學教授 小藤 文次郎

○わたくを の でやつた げんふれ ね

○微粒子病ノ說(前號ノ續キ) 駒場農學校助教理學士 佐々木 忠次郎

○雜報數件

○雜錄○矢田部良吉氏の說を駁したる書

○學會記事○東京數學物理學會

右發兌仕候ニ付舊ニ倍シ陸續御購用アラシテ願フ

東京神田裏神保町一番地 東洋學藝社

○東京人類學會

本會從來單に人類學會と稱したる處今回東京の二字を冠せしに付此段廣告す○本會の目的は人類の解剖、生理、遺傳、發育、變遷、開化等を研究して人類に關する自然の理と明にするにあり○毎月報告と出版をて會員に頒つ○規則と要する人は郵便切手二錢封し込みにて東京下谷仲徒町一丁目二十二番地東京人類學會事務所神保小虎方へ問ひ合さる可し

Romaji-Kai Kaikin ni Tsugu.

羅馬字雜誌ノ材料トナル可キモノヲ羅馬字文ニアラズトモ簡易ノ漢字假字混淆文ニテ御認メ御遣シ相成候ハ之ヲ字譯シテ掲載可致候尤モ紙數ニ限アルヲ故盡クハ載セ難ク候間事務委員會ニテ取捨可致候又雜誌ハ每號壹萬部ニ印刷致シ候間隨分讀者ノ數ハ多キト存候此段會員ニ廣告候也

東京神田區北神保町十五番地 羅馬字會事務所